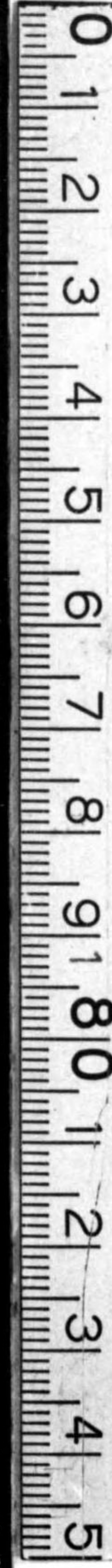


914.6-H877-2ウ



1200800307955

914.6
1877
20



始



903
182

109

914.6
H.877
2



河出書房



903
182



木の十字架

— 序に代へて —

**

「こちらで冬を過ごすのは、この土地のものではない私共には、なかなか難儀ですが、この御堂が本當に好きですので、かうして雪の深いなかに一人でお守りをしてゐるのもなかなか嬉しい氣もちがいたします。……」

この雪に埋まつた高原にある小さな教會の管理をしてゐる、童顔の、律儀さうなHさんはそんな事を私に言つたが、かういふごく普通の信者に過ぎないやうな人にとつても、こちらで他所者として冬を過ごしてゐるうちには、やはりさういふロマネスクな氣もちにもなると見える。その教會といふのは、——信州輕井澤にある、聖パウロ・カトリック教會。いまから五年前

(一九三五年)に、チェッコスロヴァキアの建築家アントニン・レイモンド氏が設計して建立した。簡素な木造の、何處か瑞西の寒村にでもありさうな、朴訥な美しさに富んだ、何ともいへず好い感じのする建物である。カトリック建築の様式といふものを私はよく知らないけれども、その特色らしく、屋根などの線といふ線がそれぞれに鋭い角をなして天を目ざしてゐる。それらが一つになつていかにもすつきりとした印象を建物全體に與へてゐるのでもあらうか。

——町の裏側の、水車のある道に沿うて、その聖パウロ教會は立つてゐる。小さな落葉松林を背負ひながら、夕日などに赫あざいてゐる木の十字架が、町の方からその水車の道へはひりかけると、すぐ、五六軒の、ごみごみした、薄汚い民家の間から見えてくるのも、いかにも村の教會らしく、その感じもいいのである。

私はその隣村(追分)で二年ばかり續けて、一人つきりで冬を過ごしたことがあるが、ときどきどうにも爲しやう様のないやうな氣もちになると、よく雪なんぞのなかを汽車に乗つて、輕井澤まで來た。輕井澤も冬ぢう人氣のないことは同様だが、それでも、いつも二三人は外人の患者のゐるらしいサナトリウムのあたりまで來ると、何んとなく人氣が漂つてゐて、萬物蕭條とし

た中に煖爐の烟らしいもの立ち昇つてゐるのなんぞを遠くから見ただけでも、何か心のなぐさまるのを感じた。そんな村のあちこちを、道傍から雉子などを何度も飛び立たせながら、抜け道をしいしい、淋しいメエン・ストリートまで出て、それからこんどは水車の道にはひると、私はいつもながいこと聖パウロ教會の前に佇んで、その美しい尖塔を眺め、見入り、そして自分の心の充たされてくるまでそれに愛撫せられてゐた……

さういふ時なんぞ、私は屢、その頃愛讀してゐたモオリアックの「焰の流れ」といふ小説の結末に出てくるそのかはいさうな女主人公の住んでゐる、フランスの或靜かな村の古い教會のことなどを胸に泛べたりしてゐた。——以前その女の身を誤らせたことのある青年が巴里からはるばるとその村までその女に逢ひに來る。彼はその若い女を偶然村の教會のなかに見出す。彼女は丁度聖體を拜受しようとしてゐるところである。青年はさういふ打つて變つたやうな女の姿を見ると、もう彼女に話しかけようともせず、又自分を彼女に氣づかせようともしない。彼は聖水を戴いて、虔ましく十字を切り、そのまま教會を出ていつてしまふのである。……

さういふモオリアック好みの小説の場面を、私は自分の目の前の空虚な教會の内側にいまし

も起りつつあるかのやうに想像を逞しくしたりしながら、いつまでもうつけたやうに教會の木柵にもたれかかつてゐるやうなことさへあつた。

そんな或日の事(二月の末だつた……)、私はひよつくり出先から戻つてきた其處のHさんといふ管理人と二こと三こと口を利き合ひ、そのまましばらく教會の側面の日あたりのいい石の上で、立ち話をしあつてゐた。丁度私達の傍らに立つてゐる聖パウロの小さな、彩色した彫像は、彫刻の上手なレイモンド夫人がみづから制作したものだといふ事を私の教はつたのも、そのときの事だつた。そして別れぎはになつてから、そのHさんがかう言つたのである。

「……この御堂が本當に好きですので、かうして雪の深いなかに一人でそのお守りをしてゐるのもなかなか愉しい氣もちがいたします。……」

「あなたが自分のまはりに孤獨をおいた日々はどんなに美しかつたか、僕はそれを羨むことではなからぬといつたつていくらぬです……」と、そんな事を若い詩人の立原道造が盛

岡への一人旅から私達のところに書いてよこしたのは、彼が亡くなる前年(一九三八年)の秋だつた。——そのときはもう私はそのやうな孤獨ではなく、その春さりげなく結婚をして、しかしその年もやはり輕井澤の山中で秋深くなるまで暮らしつづけてゐた。が、今年はどうも私の身體が變調なので、そろそろこんな山暮らしを切り上げようかと考へてゐた矢先だつた。

——立原も立原で、その夏まへからだいぶ健康を害して、一年ほど前から勤め出してゐた建築事務所の方もとかく休みがちしかつた。さうしてなれば静養を口實に、好きな旅にはかり出てゐるやうだつたが、夏のさなかの或日なんぞ、新しく出來た愛人を携へて、漂然と輕井澤に立ち現はれたりした。さう云へば、あのときなんぞ彼の弱つてゐた身體には、私達の山の家まで昇つてくる道がよほど應へたと見え、最初は口もろくろく利けずに、三十分ばかりヴェランダに横になつたきりでゐた、息苦しうな彼の姿がいまでも目に浮ぶ。——私と妻とはときどきそんな立原がさまざま旅先から送つてよこす愉たのしみしさうな繪端書などを受取る度毎に、何かと彼の噂をしあひながら、結婚までしようと思ひつめてゐる可憐な愛人がせつかく出來たのに、その愛人をおほく東京に残して、さうやつて一人で旅をつづけてゐるなんて、いかにも立原ら

しいやり方だなどと話し合つてゐた。——「戀しつつ、しかも戀人から別離して、それに身を震はせつつ堪へる」ことを既に決意してゐる、リルケイアンとしての彼の眞面目をそこに私は好んで見ようとしてゐたのであつた。

その立原は、しかし、その春の末私達が結婚しようとしてゐたときは、まだなかなか元氣で、病後の私のために何かと一人で面倒を見てくれたのだつた。さうして結婚するや否や、誰にも知らさずに、すぐ輕井澤に立つてきた私達に、次ぎのやうな手紙を添へて、私達にささやかな贈り物をしてくれた。——「御結婚のおよろこびを申し上げます。お祝ひのしるしにフランスの『木の十字架』教會の少年たちのうたつた聖歌をお贈りいたします。美しい村でおくらしになる日、森のなかの草舎でこの歌がきかれる初夏、花々のことなど、一切のけふのあはれに美しい僕の夢想を花束に編んで、それに添へた心持でお贈りいたします。それからもうひとつのは、去年の秋の奇妙な出來事が僕にえらばせた歌なのですが、これはお祝ひのしるしといふのではなしに、ただ、あの不意に家になくなつてしまつた日のかたみのために、高原の村ぐらしのなかにお持ちになつていただきたかつたのでございます。澤山の幸福とよろこびと潤澤な日

日とを恵まれますやうに。道造」——その贈り物といふのは二枚のレコオドで、その一つはフランス舊教會ラ・クロア・ド・ボア教會小聖歌隊の合唱したヴィットリアの「アヴェ・マリア」とバレストリイナの「贖主の聖母よ」。もう一つはクロオド・バスカルといふ少年歌手の獨唱したドビュッシーの晩年の歌曲「もう家もない子等のクリスマス」。——文中の去年の秋の出來事といふのは、私や立原なんぞが一しよに暮らしてゐた追分の脇本陣（油屋）が火事になつて二人とも著のみ著のままに焼け出された出來事のことである。——私達はその贈り物をよろこんで受けて、わざわざ山の家まで携へてきたが、小さなポオタブル位はなんとか手に入れて持つてくる筈だつたのがうまく行かなくて、只、その贈り物は机の上に飾つておいた。とうとうその山の家ではそれを一度も聴く機會が得られなかつた。……

その私達の山の家へは、五月の半ば頃、立原はその新しい愛人とはじめての旅行を輕井澤に試みたときに既に訪れたことがあつたのださうだ。丁度、私の父が急病になつて私達が東京に歸つてゐた間のことらしい。立原たちは、私達が留守でも構はずに、その山の家をヴェランダで三時間ばかり晝寝をしたり遊んだりしてゐたのだなどと、夏、又二人でやつて來たとき私達

にはじめて打ち明けて言ふのだつた。

「ほら、あそこにそのとき僕が樂書をした跡がある……」

さう云つて、物憂さうに椅子に首をもたせたまま、疲れた一羽の鳥のやうな、大きなぎよつとした目で彼が見上げてゐる方を私もふりむいて見ると、ヴェランダの壁の上の方の、誰の手も届きさうもないところに、なるほど彼らしい手跡で、

Wenn ich wäre ein Vogel!

と、青い鉛筆で樂書のでしてゐるのに私はそのとき漸つと氣がついた。

私達が結婚祝ひに立原から貰つたクロア・ド・ボワ教會の少年達の歌やドビュッシーの歌のレコオドをはじめ聴いたのは、その翌年の春さきに、なんだかまるで夢みたいに彼が死んでいつてしまつた後からだつた。私達はそのレコオドを友人の家に携へていつて、それをはじめ聴いたのである。

それから、その夏（去年）輕井澤へ往つたときは漸く宿望の蓄音機をもつていけたので、私の好きなショパンの「前奏曲」やセザール・フランクの「ソナタ」なんぞの間にときどきその二枚の小さなレコオドをかけては、とうとうこれがあいつの形見になつてしまつたのかと思ふやうになつた。私はその二つの曲の中では、ドビュッシーの近代的な歌よりも、寧ろイタリアの古拙な聖歌の方を好んだ。それらのゴブラン織のやうな合唱の中を、風のやうに去來する可憐なボオイ・ソプラノはなんとも云へず美しいものだつた。

その夏、輕井澤では、急に切迫したやうに見える歐羅巴の危機のために、こんな山中に避暑に来てゐる外人たちの上にも何か只ならぬ氣配が感ぜられ出してゐた。日曜日の彌撒に、ドイツ人もフランス人も、イタリア人も、それからまたポオランド人、スペイン人などまで一しよくに集つてくる、舊教の聖パウロ教會なんぞは、そんな勤行をしてゐる間、その前をちよつと素通りしただけでも、冬なんぞの閑寂さとは打つて變つて、何か呼吸づまりさうなまでに緊張した思ひのされる程だつた。前年の夏あたりは、屢、その教會の中から聖母を讃へる甘美な男女の合唱が洩れてきて、それが通行人の足を思はず立ち止まらせたりしたものだつたが、

今年の夏はどういふものか、低いオルガンの音のほかには、聖樂らしいものは何んにも聞えて来ないのだつた。

この頃朝の散歩のときなど、その教會の前を通りかかる度毎に、私はその中があまり物靜かで、しかも絶えず何物かの囁きに充たされてゐるやうなので、いつか聞覚えてしまつたヴィットリアの「アヴェ・マリア」の一節などを、ふいとそれがさもその教會の中から聞えてきつあるかのやうに自分の裡に蘇らせたりするのだつた……

**

八月の末になつてから、その夏ちう追分で暮らしてゐた津村信夫君が、きのふ追分に來たといふ神保光太郎君と連れ立つて、他に二三人の學生同伴で、日曜日の朝、ひよつくり輕井澤に現はれ、その教會の彌撒に參列しないかと私を誘ひに來てくれたので、私も一しよについて行つた。冬、一度その教會の人けのない彌撒に行つたことがあるきりで、夏の正式の彌撒はまだ私は全然知らなかつた。

みんなで教會の前まで行くと、既に彌撒ははじまつてゐて、その柵のそこには伊太利大使館や諸威公使館の立派な自動車などが横づけになり、又、柵のなかには何臺となく自轉車が立てかけられてゐた。私達はその柵の中へはひらうとしかけながら、誰からともなしに少し躊躇らひ出してゐた。さうして三人でちよつと顔を見合はせて、困つたやうな薄笑ひをうかべた。丁度、そんな時だつた、私達の背後からベルを鳴らしながら、二人の金髪の少女が自轉車でついと私達を追ひ越すやいなや、柵の入口のところへめいめいの自轉車を乗り捨てて、二人ともお下げに結つた髪の毛をびよんびよん跳ねらしながら、いそいで教會の中へ姿を消した。

私達はその姉妹らしい少女らの乗り捨てていつた自轉車の尻に、兩方とも「ポオランド公使館」といふ鑑札のついてゐるのを認めた。それは丁度、ドイツがポオランドに對して宣戰を布告した、その翌日だつた。私達は立ち止まつたまま、もう一度顔を見合はせた。

私達は、おそらくけふこの教會に集つてきてゐる人達は、それぞれの祖國の危急をおもつて悲痛な心を抱いてゐるものばかりであらうのに、そんな中へ心なしにも數人でどやどやとはひつて行くのが少々氣がひけて來たのだつた。が、それだけにまた一層、いましてさういふ人

達の中に雜じつていつた二人のポオランドの少女が私達の心をいたく惹いた。私達はこんども誰からともなく思ひ切つたやうに教會のなかへはひつて行つた。さうしてめいめい他の人達のやうに十字は切らないで、一人づつ、内陣の方へ向つて丁寧に頭を下げながら、まだすこし空いてゐた、うしろの方の藁椅子の上に順々に腰を下ろした。

一番うしろの藁椅子を占めた私は、しばらく黙禱の真似のやうな事をしてゐたが、やがて目を上げて、さつきの二人の少女の姿を會衆のうちに捜し出した。すぐ彼女たちの可愛らしいお下げ髪が目止まつた。彼女たちは一番前列に、面帕をかぶつた母親らしい中年の婦人の傍に、跪きながら無邪氣に掌を合はせてお祈りをしてゐた。

私はさういふお下げ髪の少女たちの後姿にいつまでも目をそそいでゐたが、そのうち何氣なく、立原の形見の一つである、バスカル少年のうたつたドビュッシイの歌などを胸に浮ぼせてゐた。それはドビュッシイが晩年病牀にあつて、無謀なドイツ軍のベルギー侵入の事を聞き、家も學校も教會もみんな焼かれてしまつた可哀さうな子供たちのために、彼等の迎へるであらう佗びしいクリスマスをも思つて、作曲したものだつた。

Noël i petit Noël i n'allez pas chez eux.

n'allez plus jamais chez eux, punissez-les !

(クリスマスよ、クリスマスよ、どうぞ彼等のところへは行かないで。

もう決して行かないで。さうして彼等を懲らしてやつておくれ。)

いま、さうやつていたいけな様子でお祈りを續けてゐるそのポオランドの少女たちが、ふいと立ち上がるなり、いまにもそんな悲しい叫びを發しさうな氣がする。さう、この歌のレコオドはまあ何んといふ偶然の運命から私の手もとに今あるのだらう。ちよつとその少女たちを私の家に連れていつてそれを聴かせてやつたら、まあ、彼女たちはどんなに目を赫かす事だらう……と、そんな事を考へてゐるうちに、ふいと眼頭の熱くなりさうになつた目をいそいで脇へ轉じると、其處では、何か考へ深さうな面持ちをしてゐるドイツ人らしい兩親の間に挟まれた、まだ幼い、いかにも腕白者らしい子供が、彼から少し離れた席にゐる同じやうな年頃の、しかし髪などをもう綺麗に分けてゐる子供に向つて、しきりに顔つきや手眞似でからかひかけてゐるなどがひよいと目に映つたりした。私のすぐ前に並んで腰かけてゐる津村君と神保君は、

私のやうに行儀悪くしないで、ちつとさつきから神妙に頭を下げつづけてゐるらしかった。

彌撒が了つて、なんだか亢奮してゐるやうな顔のおほい外人達の間には雑ざりながら、その教會から出てきた時は、私達もさすがに少しばかり變な氣もちになつてゐた。私達は、教會のまはりにはちちらと一塊りになつて立ち話をしだしてゐる外人達からすんすん離れて、まだ教會の中に残つてゐるらしいポオランドの少女たちの事を氣づかひながら、しかししばらくは黙つたまんまで歩いてゐた。それは何か一しよに好いものを見てきたあとで、いつも氣の合つた友人達の上に擴がる、あの共通の快い沈黙であつた。

これから森のなかの私の家へ寄つてお茶でも飲まう、——さういふ事に決めてからも、私達はとかく沈黙がちに林道の方へ歩いて行つた。かうやつて津村君、神保君、それから僕、野村少年と、みんな揃つてゐるのに、當然そこにてゐていい筈の立原道造だけのゐない事が、だんだん私にはどうにも不思議に思へてきてならなかつた。さう云へば、なんだか私ははじめて彼が私達の間にもゐないのに氣が付き出したかのやうだつた。……

一九四〇年五月

木の十字架…………… I

—序に代へて—

雉子日記

雉子日記…………… 一

續雉子日記…………… 二

春日遅々…………… 九

緑葉歎…………… 三〇

夏の手紙…………… 三三

牧歌…………… 三六

初秋の淺間…………… 三七

七つの手紙…………… 三九

山の家にて

ト居…………… 四七

夢の花…………… 五三

巢立ち…………… 六六

山日記…………… 一八

山日記又……………二四

讀書の日々

ヴェランダにて……………二七

山の宿にて……………二四

クロオデルの「能」……………二六

Ombra di Venezia……………二五

ゲエテの「冬のハルツに旅す」……………二五

リルケの「窓」……………二六

更級日記など……………二八

魂を鎮める歌……………二五

リルケ雑記

巴里の手紙……………二五

一、ルウ・アンドレアス・サロメに……………二六

二、妻クララに……………二〇

三、オオギュスト・ロダンに……………二三

或外國の公園で……………二九

雉子日記

リルケとロダン……………三三
一挿話……………三三
トレドの風景……………三六
或女友達への手紙……………四一
リルケ年譜……………五一

挿繪

高原の教會……………扉
ライネル・マリア・リルケ……………五一

雉子日記



去年の暮にすし本なんぞを買込みに二三日上京したが、すぐ元日にこちらに引つ返して來た。汽車がひどく混むので、私はスキイの連中や、犬なんぞと一しよに貨物車に乗せられてきたが、軋ひはステイムの通つてゐないだけでも、少し寒くはあつたが、この方がよつぽど氣持が好いと思つた。

雪と埋もれた野原に着いた時分には、もう日もとつぷりと暮れて、山寄りの町の方には灯かけも乏しく、いかにも寥しい。そんななかに、すつと東側の山ぶところに、一軒だけ、あかりのきらきらしてゐる建物が見える。あいつだな、と思はず私は獨り合點をして、それをなつかしさうに眺めやつた。

ハウス・ゾンネンシャインと言ふ、いかめしい名の、獨逸人の經營してゐるバンションが、近頃釜の澤の方に出來て、そこは冬でも開いてゐると云ふことを、夏のうちから耳にしてゐたが、私がそれを見たのはついこの間のこと、——クリスマスの前に、二三日續いて、ひどい大雪があつた。さう、このへんでも五〇糶位は積つた。そんな大雪がからりと晴れあがるや否や、鬱陶しく閉ぢこめられてゐた追分の宿から、私はたまらなくなつて飛び出して、膝まで入つてしまふやうな雪の中を、停車場まで歩いて、それから汽車に乗つて、輕井澤に來たが、ここでも輕便を待つのがもどかしく、勝手知つた道なので、近道をしようとして野原を突切つたのはいいが、茅なんかの埋まつてゐるところは體が半分位雪の中に入りさうになつたり、いきなり道傍から雉子が飛び立つたりして、何度も立往生せざるを得なかつた。やつと別荘のちらほらとある釜の澤の方に出たら、道もよくなり、いましてが通つたらしい自動車の轍さへ生まましくつてゐる。どこかの別荘に來た奴のだなと思ひながら、その轍を辿つていつたら、やがて山にかかると、それが消え失せ、その代りに男女の足跡らしいのが入り亂れてついでゐるので、更にそれを追つて行くと、釘づけになつた數軒の別荘の間から、私の前に突然、緑と赤と

に塗られた雛型のやうに美しい三階建のシャレエが見え出した。南おもては一面の硝子張りだが、それがをりからの日光を一ぱいに浴びながら内部の暖氣のためにぼうつと曇り、その中から青々とした棕櫚の鉢植をさへ覗かせてゐる。——近づいて標札を見ると、「Haus Sonnen-schein」とある。ふん、こいつだなと思つて、私はその家の前を何度も振り返りながら、素通りして、裏の山へ抜けようとしかけたが、頭上の大きな樅の木からときをりどつと音を立てて雪が崩れ落ちてくるのに目が開けられないほどなので、又、引つ返してきた。その時ふいに、クリスマスに來たいと言つてきた阿比留信にこんなところに泊らせてやつたら愉快がるだらうと氣まぐれに思ひ立つて、そのままづかづかと裏木戸から這入つて、臺所を覗いて見ると、ストオヴの側で白いエプロンをかけた日本人の若い娘が卓の上に水仙の花を惜しげもなく一ぱい散らかして、いくつかの花瓶にそれを活けてゐたが、私の意を傳へると、きのふ主人夫婦も横濱から來たばかりで、何でも、もうクリスマスには大ぜいな客があるやうに申して居りましたけれども、……まあ、中へおはひりになつてお待ち下さい、と人懐こさうに私の方をまじまじと見ながら、さう言ひ置いて、奥へ引つ込んでいつた。私はもうそんなことはどうだつていい

んだと云つたやうな、ぼうつとするやうな氣持で、好い匂ひのするストオヴに頬を赤くしながら、眞白いエナメル塗りの臺所の一隅に片寄せられてある、男と女の長靴から、さかんに湯氣が立ちのぼつてゐるのを見入つてゐた。

二

いま、私の暮らしてゐる追分ときた日には、村中で商ひをしてゐるのは、村はづれの居酒屋みたいなのと、煙草や駄菓子なんか賣つてゐるのと、たつた二軒。——正月こつちへ來てから、無精を極め込んで、一度も髭をあたらずにゐたが、或日、ぶらりと輕井澤まで汽車に乗つて理髮店に行つた。輕井澤の町だつて、いまは大抵の店は何處かへ店ごとそつくり荷送されでもし、さうな具合に、すつかり四方から荷箱同様の板を釘づけにされてゐる。唯二三軒、うす汚い雜貨店みたいなのが、いまでも店を開いてゐるが、そんな店先にもクレヴンやベル・メルの罐が店ざらしになつてゐるのは、さすがに輕井澤らしい。郵便局の横町にある理髮店に飛び込んで髭をあたつて貰ふ。南を向いた店先には一ぱい日がさし込んでゐる上に、ストオヴを自棄に焚

いてゐるので、苦しいくらゐ熱い。この店は夏場は五つか六つ鏡が並べてあつた筈だが、いまはたつた二個、——さうして他の鏡のあつた場所は、何處かの別荘のためらしい、バネの弛んでゐるさうなベッドが占領してゐる。ここでこの親方は、客の來ない時は晝寢でもしてゐるのだらう。——私の向つてゐる凸凹のある鏡には、筋向うの、やつぱり釘づけにされた、そして横文字の看板だけをその上にさらし出してゐる、肉屋と、支那人の洋服屋が映つてゐる。おや、何だか見覚えのある奴が通るぞ。なあんだ、テニス・ユオトの番人か。やあ、こんどは自動車を通る。毛唐の奴らが鯨づめになつてゐやあがる。ふふん、さてはハウス・ゾンネンシャインの連中だな、鏡の中に映らないが、自動車が何か引きすつてゆく音がする、何だい？ と訊いたら、櫓ですよ、と親方は無雜作に答へる。

それからいそいで理髮店を飛び出すと、きつとゴルフ場へでも行つて櫓で遊ぶのだらうと思つて、そつちへ行つて見ようと、まだ雪の大ぶ残つてゐる町の裏側の「水車の道」へはひつて聖パウロ・カトリック教會の前まで行きかけたけれど、道は悪し、なんだか面倒くさくなつて、その筋向うの裏口からホテルに飛び込んで、お茶を飲まして貰ふ。勿論、客なんか一人もゐな

い。そこで軽便の出るまで、ホテルの娘と無駄口をききながら、ストオヴに嚙じりついてゐた。追分の宿に歸つたら、思ひがけず田部重治さんが来てゐられた。越後の湯澤とかへ兼常さんやなんかとスキイに行かれたお歸りだとか。皆と高崎で別れて、お一人だけわざわざこちらに寄られた由。——茶の間の大火燵の上で、鳥鍋をつつきながら、誠ちゃん（宿の主人）も加はつてよもやまの話。——田部さんは本當に追分がお好きらしい。ことにこんな風に一杯開こし召されようものなら、誰に向つても、追分のいいことを繰返し繰返し語られる。僕なんぞはもういい加減耳に聒聒が出来てもよささうな筈だが、一向聞き倦きもせず、にこにこしながら合槌を打つてゐるのだから、これも不思議だ。

たかが浅間山の麓で、いくぶん徳川時代の古驛の佛をそのまま止めてゐるといふよりほかに何んの變哲もない、こんな寥しい村が、一體何んでそんなにいいのだらう？ と他の人が聞いてゐたら、思ふかも知れない。

この間、辻村伊助の「スウィス日記」を読んでゐたら、リルケがその晩年を送りながら「ドワイノ悲歌」を書いたシャトオ・ド・ミュゾットのある、ロオヌ河のほとりの、シエルといふ

村なんぞは、汽車で素通りしてゐる。ああいふ旅行者にとつては、取るに足りないやうな寒村が、かへつて詩人にとつては仕事をよく實らせて呉れるのかも知れないのである。

三

浅間山だけがすっかり雪雲に掩はれ、その奥で一人で荒れてゐるらしく、この山麓の村なんぞには、日が明るく射しながら、ちらちらと絶えず雪の舞つてゐるやうなことがある。そんな時なんぞ、どうかして不意にその雲の端が村の上にかかると、南に連つた山々のあたりにはくつきりと青空が見えながら、村全體が翳つて、ひとしきり吹雪く。と思ふと、すぐ又、ばあと日があたつてくる。ここでは、そんなやうな空合ひの日がかなり多い。

田部さんがリュックを背負つて歸つて行かれた七日の夕方、そんな雪催ひだつた。途中の落葉松林のはづれまでお見送りして、其處から一人で歸つてきながら、私はこの村にかうして一人で氣儘に居られるのを幸福に思はなければならぬのかな、と考へたが、それにはいささか、半信半疑だつた。

それから二三日立つてから、去年の夏この村で知合になつた英夫君が、正月になつたら送つてくれと云つて頼んで置いた空氣銃を東京からわざわざ持つて来てくれた。

翌日、一日ちう二人で空氣銃をもつて森の中を駈歩いた。森の中はまだ雪が相當深い。これは狐の、これは兎の、それからこれは雉子か山鳥かどつちかだ、と雪の上に印せられてゐる色んな足跡を、この間教へられたばかりのをおぼつかなく思ひ出しながら、そんなことを言ひ合つてゐる間にいきなり私達の行手から飛び立つ鳥どもの羽音に、空氣銃を手にしてゐることなんどちよつと思ひ出せない位に、びつくりしたりしてゐる、即製の獵人たちの間抜けさ加減！一日ちうの獲物といつたら、たつた頬白が一羽。……

その翌日、英夫君は二時の汽車で歸るといふので、晝飯を早目にすませてから、お別れに村の西のはづれの、分去わかまのところまでぶらつと散歩に行つた。馬頭觀音やなんかはまだ雪の中にしよんぼりとしてゐる。二人でその傍に佇んで、しばらく淺間山の方を眺めてゐると不意に思ひがけなく私達の頭上を、一羽の青味を帯びた大きな鳥が翼を水平に擴げたまんま、すうと低目に飛び過ぎた。やあ、雉子だ、雉子だ、と私達が言ひ合ふ暇もないうちに、街道の向うの小

さな松林の中に、突然よろめくやうになつて、その雉子は下りて行つた。いそいで私達もその林の中へ躍り込んで見ると、もう飛ぶ力のなくなつてゐるらしいその雉子は、難なく英夫君の手で生捕りにされた。

何處も怪我はしてゐないやうだが、大方鐵砲打ちに翼でもやられて、やつとここまで山の中から逃げて來たのかも知れない。雄だから、綺麗な尻尾をしてゐた。空氣銃でも持つてきてゐたら、それで射とめたのだと宿に持ち歸つて威張れようが、あいにく手ぶらなので、へんな恰好で、そのままそれをぶらさげて歸つた。

英夫君に東京へお土産にしたまへと勧めたが、歸るのはもう一日延ばして、こつちでそれを皆と一緒に食べて行きたいと云つて聞かなかつた。

雉子はまだ辛うじて生きてゐる。それを不自然な殺し方はしたくないので、宿の老犬ジャックを連れて、裏の林へ行つて、その雉子を放したら、昔獵犬だつたジャックはその逃げようとする雉子を巧に追ひ廻しながら、要領よく噛み殺し、羽だらけになつた口に銜へたまま、それを私達のところへ持つて来てくれた。

雉子は悪食だから、肉が臭いと聞いてゐたが、鍋にしてもそれほどいやな臭ひはしなかつた。が、なんだかすこし無氣味で、あんまりうまいとも思はなかつた。

一九三七年一月十七日

續雉子日記

英夫君が歸京してから、こんどは私は一人で毎日のやうに空氣銃を手にして、ジャックを連れては、殆ど二三日おきぐらゐに降るのでますます雪の深くなつた森の中を愉快さうに歩きまはつてゐたが、少しその度が過ぎたと見え、とうとう十日ほど前から風邪を引いて、いくぢなく寝込んでゐるでいたらくである。枕もとにはお義理のやうに横文字の本を堆高く積んであるが、見てゐるのは大抵例の「スウィス日記」か、ベデカアのスイス案内書位なものである。

この前の日記に、私はリルケが晩年住まつてゐたシャトオ・ド・ミュゾオのある村をラロンと書いて濟ましてゐたが、實はラロンはリルケの墓のある村の名で、同じヴァレ州の同じロオヌの川沿ひながら、ミュゾオのあるのはそれより少し下流に位してゐる、シエルといふ小さな町から更に上方へ入つた、葡萄畑なんぞの眞ん中らしい。そしてそのミュゾオもシャトオとはほんの名ばかり、むしろ十三世紀頃に出來た小さな塔のやうなものであるらしい。

一九二一年の秋のことである。それまでスイス中を轉々としながら、長い間中絶されてゐる「ドウイノ悲歌」を再び続けるべく、そのために外界と遮絶して、全く一人きりになつてゐられるやうな隠れ場所を捜しあぐねてゐたリルケは、遂に伊太利との國境にもはや近いヴァンエ州にやつて来て、その何處かプロヴァンスや、また西班牙の或物をさへ思はせるやうな一帯の風物を一目見るや、此處こそ自分の求めてゐる場所と信じて、その町の一つのシエルに暫く滞在し、附近を捜しまはつたがそれも空しく、とうとうその町をも立ち去らうとする間際になつて、偶然或る飾窓に賣物に出てゐる一つの塔の寫眞を認めた。それは彼の或る友人の寢臺の上の壁に以前から掛つてゐた繪の中の古い館だつた。そしてそれがミュンツォだつたのである。それを彼はその同じ友人の世話によつて漸く手に入れることが出来た。

「恐ろしい山々の荒蕪たる風物の中に全く孤立せる小さな館。……私はこれまでかかる孤獨な存在、かかる沈黙との極度の親密を想像だに出来なかつた。親愛なるリルケよ、あなたは純

粋時間の中に閉ぢ籠つてゐるやうに私に思へた……」と、その頃其處を訪れたボオル・ヴァレリイは書いてゐる。

翌年の二月である。十年前の、一九二二年ドウイノにて着手せられ、一九一四年以來殆ど全く中絶してゐた「ドウイノ悲歌」は遂にそのシャトオ・ド・ミュンツォにおいて完成せられた。しかもそれは僅か二三日で出来上つたのである。

それを書き上げた夜半、リルケはもうペンを握る力もない位に疲労しながら、眠る前にその出版者キッペンベルクにその完成を知らせてやつた手紙には甚だ人の心を打つものがあるが、その一節に曰く、「……私は冷い月光の中に出て行きました。そして小さなミュンツォを大きな獸のやうに愛撫してやりました……かかるものを私に授けてくれた、その古い壁を。それからまたあの破壊されたドウイノをも。」（ドウイノは大戦中に伊太利軍のために破壊された。）

それから數日と立たない裡に引續いて又、その支流とも云ふべき小さな作品が殆ど求めずして出来た。「オルフォイスに捧ぐるソネット」と呼ばれる五十餘篇のソネットがそれである。それまでもとかく健康のすぐれなかつたリルケは、その仕事の過勞のためにいよいよ健康を

損ねてゆき、その後殆どそのミュゾオに居ついたまま、僅な詩作と、二三の翻譯をしたくらゐで、遂に一九二六年十二月の末に死んで行つた。死んだのは、しかし、その愛するミュゾオではなく、發病後強ひて移されたレマン湖畔のモントルウの療養所である。

病名は壞血症といふものださうだが、その病氣の直接の原因になつたと云はれる、いかにもリルケの最後らしい、美しい挿話を、私はつい最近讀んだ。

或る日、リルケはミュゾオを訪れることを豫め約束してあつた一人の婦人を待つてゐた。その婦人は約束の時間よりもやや遅れてやつて來たが、それを待つてゐる間、リルケはその客に與へようとして、庭に出て薔薇を摘んだ。(ミュゾオの庭には、詩人が自分の手で百株ばかりの薔薇を植ゑてゐたのである。)その時その薔薇の棘が彼の手を傷つけた。そしてその何でもなかつたやうな小さな傷が次第に悪化して行つて、遂に壞血症の原因になつたと云ふのである。「つねに女性の偉大さと薔薇の美しさを説いてゐた詩人はかくして一女性のために摘ん

だ薔薇の一つに刺されて死んで行つたのである。その最後がいかに痛ましくあつたとは言へ、それはリルケがかれ独自の死を死すべく選んだものであつた。」とその話の筆者は云ふ。

そのミュゾオの館の庭には、いまでも詩人の手植の薔薇が咲いてゐるさうである。私がか日スウィスにも行けるやうな身の上になれたら、何よりも先きに、そのミュゾオの館と、それから詩人の墓のあるラロンの村とを訪れることだらう。

が、それはいつのことやら……。私はそれより今は、本はとつくに買ひ込んで置きながら、まだ手をつけてゐない、そしてリルケ自身も「長い、時としては骨の折れる讀書」と云ふその「ドワイノ悲歌」を何とかして克服せんことをこそ思ふべきであらう。

一九三七年二月十一日

「雉子日記」のなかで、私は屢、ミュゾオの館やふたのことを持ち出したが、それについて富士川英郎君から非常に興味のあるお手紙を頂戴した。「ミュゾオの館」といふのは、御承知のやうにリルケがその晩年を過ごした瑞西のヴァレエ州にある古い *château* のことである。その見もしない *château* のことなんぞを私はいろいろ知つたか振りをして書いて見たのであるが、富士川君の注意によつて、二三此處に訂正して置きたいと思ふのである。

先づ、その *château du Muzot* の読み方である。私はそれを普通にシャトオ・ド・ミュゾオと發音してゐた。ところが富士川君の注意によると、リルケ自らが一九二一年七月二十五日にマリイ・フォン・トゥルン・ウント・タグジュス・ホオエンロオエ夫人に宛てた手紙のなかにそれを *Muzotte* と發音してくれと書いてあるのださうである。恐らくそれがその地方特有の呼び方なのであらう。勿論、*Muzotte* は富士川君も言はれるやうに佛蘭西式にミュゾットと發音するのだらう。従つて私の用ひてゐた「ミュゾオの館」は「ミュゾットの館」と訂正されなければならない。

以上はその館やふたのほんの名稱のことだが、富士川君はその名稱のことから更に、その前述の手紙の中でリルケがいろいろとその館の構造や由來について詳しく語つてゐる由、まだその手紙を見てゐない私に懇切に書いてきてくれたのである。——それによつて私はもう一つ訂正して置いた方がいと思ふ箇處を發見したが、私はその詩人の愛してゐた古い館をただ漠然と十三世紀頃のものとしてゐたが、その頃から残つてゐるのはその建物の根幹だけで、それから何度も建て直され、現存してゐる天井や家具の多くは十七世紀頃のものらしい。それからリルケがその館のさまざまな歴史を書いてゐるうちに、こんな話があるさうである。

十六世紀の初め頃に、その館に *Isabelle de Chevron* といふ娘が住まつてゐた。その娘は *Jean de Monthey*s といふ男と結婚した。が、それから一年立つか立たぬうちに、マリニヤンの戦が起り、その夫はそれに果敢なく戦死してしまつた。若い寡婦になつたイザベルは再びミュゾットの館に引き取られた。やがてそのうちに彼女の前に二人の求婚者が現はれた。そしてその二人は決闘して、お互に刺し合つて二人とも死んでしまつた。その夫の戦死には耐へることの出来たイザベルも、それには耐へ得ずして遂に發狂してしまつたのであつた。そして夜毎にミイェジュにある二人の求婚者の墓まで、薄い衣をまとつたまま彼女はさまよつて行くのだつた。そして或る冬の夜、彼女はその墓場に息

絶えてゐた……

リルケは死ぬとき遺言して、そのイザベル・ド・シュヴロンの眠りを妨げてはいけないから、ミエゾットの近くのその墓地には自分を葬らないやうにして貰ひたいと言つたといはれる。……リルケの墓のあるラロンが、もう殆どシンブロンにも近い位、ずつとロオヌの谷を遡つたところにあることは、私が前にも書いたとほりである。その墓の寫眞が、去年の「インゼルシッフ」のクリスマス號に載つてゐたさうだが、それもまだ私は見る機会を得てゐないのである。

三月二十五日

春日遅々

四月十七日 追分にて

ホフマンスタアルの「文集」を読み続ける。嘗つてビアンキイ女史がこの詩人のことをリルケと並べて論じてゐた本を読んだ折、既に物故したこの詩人のバセティックな、眞の姿を知つて、それ以來何となく心を惹かれてゐたが、最近その文集の佛譯を手に入れることが出来て、數日前から読み續けてゐるのである。

これまで讀了した數篇——シエクスピアを論じて劇の本質は性格描寫や筋などには無く、その雰圍氣アトモスフェアにあるといふ説を立てたもの、或はゲエテの「タツソオ」に就いて語つて從來閑却されがちであつた公女レオノオレの重要性を指摘したもの、或は又、シュテファン・ゲオルゲの詩を取り上げて詩の本質を明らかにしつつ、十數年後の純粹詩の發生をいち早くも豫見してゐたやうな「詩に就いての對話」——などで見ても、ホフマンスタアルが過去の大詩人の崇高

な作品を自分の裡に見事に生かし得てゐたばかりでなく、將來に於ける詩の動きにも敏感な見透しをもつてゐたことは、まことに敬服の外はない。

けふ讀んだのは「Lord Chandosの手紙」といふ一篇である。

この西暦一六〇三年八月二十二日の日付のある古い手紙は、フィリップ・ロオド・チャンドスと云ふ英吉利の文人がその友人フランス・ベエコンに宛てて、一切の文學的活動を放擲する辯疏のために書いた手紙である由が註せられてゐる。それはしかし、言ふまでもなくホフマンスタールの假託であらう。

ともあれ、そのロオド・チャンドスと云ふのは、英吉利文藝復興期に多く見出されるごとき博學多才の人である。彼は年少の頃から牧歌的な詩を作つたり、祖父の残した記録を元にしてヘンリイ八世年代記を書かうと計畫したり、又、各國各時代から資料を集めて箴言集のやうなものを編むことを夢みたりしてゐた。が、突然、彼はさういふ一切の仕事を放擲した。そしてそのまま長い沈黙に這入つた。

その長い沈黙を憂へて手紙を寄せた昔の友人のベエコンに對して、その沈黙の辯明を試みた

のが即ちこの手紙であるが、以下それを少し抄して置かう。――

「簡単に云ふと、自分の場合は次のやうなのです。自分は或る對象を、思考とか言語などもつて、順序立てて取扱ふことが全然出来なくなつてしまつたのです。先づ、自分は普通に人が使つてゐるやうな言葉でもつて、高尚なことも尋常なことも話すことが出来なくなりました。「精神」とか「魂」とか「肉體」とか云ふやうな言葉を口にするのが云ひ知れず不快に感ぜられるのです。……何にせよ、批判を明るみに出すためには使用しなければならぬ抽象的な語は、悉く自分の口の中で、腐つた菌きもちのやうにこなごなになつてしまふのでした。一度なんぞはかういふことがあつた。四つになる娘のカザリン・ボムピリアが子供らしい嘘をついたのを叱責して、いつも正直でなくてはいけないと云つて聽かせてゐるうちに、自分の口に簇がつてゐた考へが、突然、ぎらぎらした色を帯び出し、それが次から次へと移つて行つたので、自分は慌ててその叱言を打ち切らなければなりませんでした。恰も生理的な不快に襲はれでもしたかのやうに。實際、自分の顔はいたく青ざめ、そして額の上をはげしく壓しつけられてゐるやうな氣がしました。自分は娘をひとり残したまま、いそいで背後のドアを締めました。そして馬

に乗つて、人氣のない牧場をひと時疾驅したおかげで、漸く自分は落着くことができました。」
そんな風にして、ロオド・チャンドスは、今日ならば一種の神經衰弱とでも呼ばれさうな、
無爲の、苦しい状態に達する。かくして彼は一切の精神生活、一切の思索を斷念しなければならなくなる。しかしながら、さういふ殆ど植物に近いやうな存在の裡にも、彼は一種異様な幸福を見出しはじめるのである。

「かういふ存在は、自分の隣人や、自分の親戚や、この國に土地を所有してゐる貴族の大部分のそれとは殆ど區別できません。それは幸福な、生き生きとした瞬間を全然もたないわけではないのです。そんな瞬間がどういふものであるかを、貴兄に理解せしめるのは容易ではありません。ここでもまた、言葉が自分には不足するのです。それは名前を持たぬもの、また疑もなくそれを持ち得ないもの、そしてただ花瓶の中のやうに、自分のまはりの目に見える事物の中に、溢れるばかりに生を注ぎ入れながら、そのときちらりと姿を見せるきりものだからです。例を引いて見なければ貴兄に納得していただけないかと思ふので、つまらない例ですが二三擧げさせて貰ひます。例へば、如露だとか、畑に棄てられた鋤だとか、日向に寝てゐる犬だ

とか、みすぼらしい墓地だとか、不具者だとか、小さな農家だとかが、自分の靈感の場になれるのです。習慣になつてもうその上を何氣なしに目が滑つてしまふやうな、それらの事物やそのほかそれに似た數々の事物が、突然、思ひもよらないやうな瞬間に、それを表現するために、一切の言葉があまりにも貧弱に見えるほどな、莊嚴な、感動すべき跡形を自分に刻みつけて行くのです。そして目の前にない事物の明瞭な像イメージまでが、全く不可解な方法でもつて、思ひがけず甘美に、自分をば神々しい感情で縁縁まで一ぱいに充たしてしまふことさへあるのです。」
或夕方、ロオド・チャンドスはいつものやうに馬に乗つてゐた。先刻畑の一つへ鼠のための毒藥を多量撒くやうに云ひつけて置いたことなど、もうすっかり忘れてしまつてゐた。そしてよく開墾された田地の中を並足で馬を進めながら、ところどころに片寄せられて盛り上つてゐる小石の塊だの、すつと畑の起伏の向うに沈んでゆく大きな夕日のほかには何んの印象も受けずにゐた時、突然、彼の心の裡に、鼠の群が死にかけながら苦しみがいてゐる穴倉のなかの光景がひよつくり浮んだ。毒藥の劇しい臭ひに充ちた、穴倉のなかのひんやりと重くろしい空氣、鼠たちの苦しげな叫び、出口をめがけての空しい殺到、塞がれた裂れ目の前ではつたり出

會つた二匹の鼠の怯え切つたつめたい眼差し、——さういつたすべてのものを彼は自分の裡にまざまざと感じた。が、それは決して憐憫といつたやうなものではなかつた。それはさういふ人間的な感情より以上のものであつたし、又それ以下のものであるとも云へよう。それはそれらの動物たちへの自己没入、かぎりもない同化によるのであつて、その無我の状態には全く劇的要素がなく、また人間的要素さへいささかも無いのだ。——そのことは彼の擧げるもう一つの例によつて一層はつきりせられるのである。

他の夕方、ロオド・チャンドスは胡桃の木の下に、植木屋の忘れていつた、半分水のはひつてゐる如露を見つけた。——「その如露、その中にはひつてゐる、そして木の影がうす暗くしてゐる水、その水の面をすいすいと泳いでゐる一匹の兜蟲、——それらの意味のないものが、何か無窮の前に自分が立たせられてゐるかのやうな戦慄で充たし、自分を頭から足の先までぶるぶると震はせました。そして自分は何かの言葉をわめき出したと思つたほどでしたが、若し自分がひよつとしてそんな言葉を見出したとしたら、自分は自分の信じて居らぬ熾天使の奴さへ自分の前に跪つかせたであります。しかし自分は沈黙したまま、その場を立ち去りま

した。そして數週間の後、その胡桃の木を認めるとき、自分はそれを横目でおづおづと見ながらその傍を通り過ぎました。その思ひ出がいまだにその幹のまはりに漂つてゐるやうな奇蹟や、近くの灌木にまだつき纏つてゐるやうな彼方かなたの戦きを逃がさないやうにとしながら……」

さう云つたやうな瞬間には、まことに取るに足らないやうなもの、たとへば犬だとか、鼠だとか、兜蟲だとか、發育の悪い林檎の木だとか、丘をうねりくねつてゐる車道だとか、苔蒸した石だとか、何物よりも貴重なものになる。すべてのもの、彼のまはりに存在してゐるすべてのもの、彼の思ひ出すすべてのものが、彼には實に意味深く見えてくる。そして彼自身の空けたやうな頭の状態さへ何かの意味を有つてゐるやうに思はれる位だ。「……けれども、そんな異様な幻惑が自分を離れると、自分はもう何も言ふことが出来ません。かういふ自分と世界全體との間の調和がどういふものから成り立つてゐるか、そしてどんな風にしてそれが知覺せられるやうになるかを、何か意味のある言葉でもつて自分が云ひ現はせないのは、自分の内臓の運動だとか自分の血液循環の停止などに就いてはつきりした説明を與へにくい以上であります。」

精神的なのか、肉體的なのか、どちらだか分からないやうな、そんな危機を除いてしまふと、彼の生活は殆ど信じがたいほど空虚なのである。彼はさういふ心の空虚な状態を自分の妻や雇人たちにやつと隠し了せてゐるのである。

「自分はいま自分の家の一翼を建てさせてゐます。そしてときには建築技師とその仕事の進行について程よく話を合はせてゐます。自分は自分で財産を管理してゐます。そして小作人や雇人たちは、前よりいくらか自分が無口になつたと思ふにせよ、昔と少しもちがはずに氣立のいい方だと思つてゐるにちがひありません。彼等のうちの誰一人だつて、夕方、各々の戸の前に帽子を手にして佇すみながら、馬で通り過ぎる自分を見送つてゐる間、自分の目が、詩の文句かなんか搜してゐる人なんぞのやうに、無言の欲望をもつて彼等の腐りかけた床板を撫でまはしてゐるとは思はないでせう。又、誰一人だつて知らないでせう、自分の目がいつまでもいつまでも醜い小犬だの、花瓶の間をしなやかに滑り抜ける猫だのの上に注がれてゐるのを、それからまた百姓家のなかの粗末な、みすぼらしい品々の間に、言語を絶した、限界のない、何か謎めいた恍惚の源になり得るやうなものを自分の目が搜してゐるのだといふことを……。」

**

私はもうその手紙の終りに近いらしい頁を机の上に開いたまま、何かしら感動しながら、外へ出て行つた。目がひどく疲れたので、すこし歩いて來ようと思つたのである。いかにも春めいた日である。しかしまだ何處やら冷くてひんやりとしてゐる。二三日前に、もうこれが最後かと思はれるやうな雪が降つた。その雪が山の巖にも、屋根の上にも、畑の蔭にも、さすがに大方は消え去つたが、まだあちらこちらに少しづつ残つてゐる。淺間山は、雪のないところだけ、妙に黝すんで見える。私ははげしい感動で一ぱいになつて、かへつて妙に空けたやうな心の状態で、西の方へ歩いてゆく。村はづれのところから、二又になつて分かれる道を、北側にとる。其處からは兩側ともすつと落葉松の裸かの林である。一日ぢう日蔭になつてゐると見える、その左側のせきはすつと汚らしい雪で埋まつてゐる。そんな残雪がそのまま透いた林の奥まで消えずにゐるところもある。一面に褐色の小さな孔の出來てゐるのは、兎でも跳ねまはつた跡らしい。軟かさうに日のあたつてゐる、もう一方の側の林には雪は全然なくて、下草がも

う萌黄色になりかけてゐる。鶯がまだ幼稚な啼き方で、ときどき啼いて見せてゐるのも、どうやらこつちの林の奥ばかりらしい。……私はさうやつて無心に數丁ほど歩いてゐるうち、やつとそんな落葉松林が切れて、それから今度は雜木林に變らうとする接ぎ目から、はるか向うに眞白に赫いてゐる北アルプスが望まれる地點まで達した。しばらくそこに立ち止つて、切なげな眼差でそれらの山々を眺めてから、私は再びいま來た道を引つ返した。そして少し草臥れて、やつと村はづれまで戻ると、さつきまで人つ子ひとり居なかつた其處の、觀音像や古碑なんぞの立ち並んでゐる小高い草つ原に、村の小さな女の子たちが十人許り、がやがや騒ぎながら遊んでゐた。私はそこからやや離れた、觀音像の傍らに、足を投げ出した。何といふこともなしに、皆の方には背中を向けて。——そのうち不意にそいつらの騒ぎが一層喧しくなつたやうだ、と思つてゐると、私の背後にその女の子が一人忍び足で近づいて來るやうな氣配である。それでもまだ私が知らん顔をしてゐると、その女の子は私のすぐ傍までこつそりと來て、何やら白いものを私の足もとに置くと、今度は笑ひ聲を立てて驅け去つた。——見ると、硝子の破片の上に、雪の小さな塊を載せ、それになんだか薄黄と薄紫の細かい、草花とはほんの名ばかりのやうな奴が、數本、あしらつてある。——私が笑顏をして、皆の方をふり向いたら、女の子たちは大騒ぎをしながら、石碑のかけにみんな姿を隠してしまつた。氣がついて見ると、私のすぐ傍の觀音像の前にも、私の前にあるのと同じやうな、あはれなる供へ物が置かれてあるのである。……

それから數分後、私は、そんな可哀さうな女の子たちに別れて、宿の方へ戻つて來つた。今度はみちみち、よく注意してゐると、道傍や畑の縁などに、往きにはすこしも氣のつかずにゐた、そんな薄黄だの薄紫だの、いぢらしいやうな細かい花が一面に咲いてゐた。

一九三七年

緑葉歎

青葉頃になると、どうも僕の身體の具合が悪くなるのです。それにやられまいと思つて、随分用心してゐるのですが、いつのまにかやられてゐます。こんどなども、ちよつと気分が悪かつたので、二三日安靜にしてゐたら、それからすつと微熱が続いて、もう半月ばかりになるのに、いまだに寝込んでゐる始末です。それにどうしたのか、足がなやんでなりません。あの足首の、丁度靴下が一番眞先に穴のあいてしまふところですが、あそこところがへんに痛い。もうせん、靴下をはいたら大きな穴があいてゐたが、穿きかへるのが面倒くさかつたので、そのまま出かけたところ、途中でそこが痛くなつてきて弱つたことがあります。そのときのことを、いまだにそいつが根にもつてゐるんぢやないか、といふ氣さへしてゐます。もつともそのときは片つぽだけでしたが、いまは兩足が痛い。起居にも不自由を感じてゐる位です。こんなときには誰か友人でも来てくれるといいなと思ひますが、さうなると意地の悪いもの

でなかなか来ない。やつと今日、立原道造君が来てくれました。何か手に大きな紙をまいてもつてゐる。何だと思つたら、それは僕がこの間冗談半分に頼んでおいた僕の輕井澤の別荘の設計圖なのです（道造君は建築科の學生です）。實は僕の方ではもう忘れかけてゐただけけれど、この間、南輕井澤の方に土地をもつてゐる友人が、こんど自分のところでもそこに別荘を建てるんだが、よかつたら僕もその側に、小さな小屋を建てないかと勧めてくれた。食事一切はその友人の家で面倒を見て貰ふことにすれば、ただ仕事と睡眠だけのための場所、つまり、木のベッド一つと、木のテーブル一つを入れるだけのコッテエヂ、——それにまあ窓が一つあればいい、そんな丸太小屋なら、せいぜい五十圓もあれば出来るんぢやないか、と側にゐた道造君を顧みて云つた。出来るかも知れないといふので、僕は本氣とも冗談ともつかずに、ぢや設計してみてくださいと頼んでおいたのです。——ところが、その道造君の設計してきたコッテエヂは、どうして、ヴェランダなんぞもついてゐて、なかなかハイカラに出来上つてゐます。だが、僕はその落葉松林（！）のなかに立つてゐるコッテエヂを見ながら、君、これぢや五十圓ぢや出来まい、百圓位はかかりさうだな、と言ふと、ええ、その位はどうしてもかかると言ふ

のです。が、それだけぢやない。その他に大工の手間賃だの、何やかやら見積つて見ると、さあつと二百圓ないとその設計通りのコツテエヂは、出来さうもないらしいのです。——ささやかな夢を見て楽しんでゐると、とかく第三者がその夢を否應なしに大きなものにさせてしまつて、當人を不幸にさせがちなものです。道造君の設計してきた二百圓のコツテエヂの前で、僕の夢みてゐた五十圓のコツテエヂは、あまりにも貧弱なものになつてしまつたのです。そして、もうどうでも勝手にしやがれと思つて、その折角こしらへてきてくれた設計圖はそこにおつぱり出してしまひました。

それから他の話をしてゐるうちに、道造君が、この夏また追分に行きたいがその滞在費を自分で稼げといはれてしまつたので、何か自分に出来る仕事はないでせうかと言ひ出しました。丁度僕は或る編纂物のために誰かに手傳つてもらはうと思つてゐたところだつたので、丁度いいと思ひましたが、コツテエヂの一件ですこし旋毛を曲げてゐたので、いい復讐が出来ると思つて、面白半分に道造君をからかひ出しました。そりあ、君、昔の吟遊詩人のやうに、ひとつ堅琴でももつて、輕井澤の別莊地を「オオカッサンとニコレット」でも唄ひながら歩いたらいいぢやないか、一番君に似合ふよ、なんて言つてやつてゐるうちに、道造君がだんだん悲しうな顔をしだすのに氣がつかしました。すこし可哀さうになつたので、いい加減で編纂物の話をもち出してやりました。他人の立場に立つて、自分に氣に入るやうな夢を見ることが、どんなに相手には残酷なものだか、これですこしは身につまされたでせう。

夕方、道造君が歸つてから、今まで小止みなく降つてゐた梅雨らしいのが漸く上つたやうなので、足はまだ依然として痛みますが、ちよつと外氣を吸ひたくなつて、おもてへ出て見ました。公園はいま何處もかも緑です。花のさいてゐるやうな木は見あたりませんが、何處からともなく、とても甘酸っぱいやうな匂ひがしてくる。恐らく目につかないやうな白い細かい花でも咲いてゐる木がそこいらにあるのでせう。さういふ目立たない花には、かへつて思ひがけず強烈な匂ひのあるものがあるものです。いきなり匂ひをかいで、おやと思つて、あたりを見まはして、はじめて何あんだこんな花かと思ふやうなことが度々あるもんですね。——いまもいま、そんな匂ひをかいだら、僕はひよいと昔、さう、丁度今の道造君ぐらゐの時分に讀んだことのある、リイラダンか何かの短篇の一節を思ひ出しました。なんでも修道院かなんかの庭園

の茂みの中で、少年と少女があひびきをしてゐる、どんなことを話し合つてゐるのかと、そつと忍び寄つて立聴きしてみると、「もうすこしお金を……もうすこしお金を……」と二人は熱心に囁き合つてゐたといふ一節です。……

一九三六年五月、隅田公園にて

夏の手紙

立原道造に

七月二十五日、追分にて

この前の土曜日にこちらに来るかと思つてゐたが、とうとう來られなかつたね。君のゐる大森の室生さんの留守宅の方へ手紙を出すと、どうも郵便物はみんな輕井澤の別荘の方へ廻送されてしまふらしいから、君の働いてゐる建築事務所宛にこの手紙を出すことにした。が、どうも輕井澤に建てるヒュッテの設計を頼む手紙でもあるのならないが、君に詩集を貰つたお禮を書くんぢやあ、なんだか少し變な氣がするね。

君の詩集（「萱草に寄す」）なかなか上出来也。かういふものとしては先づ申分があるまい。何はあれ、我々の裡に遠い少年時代を蘇らせてくれるやうな、靜かな田舎暮しなどで、一夏ちうは十分に愉しめさうな本だ。しかしそれからすぐにまた我々に、その田舎暮らしそのものとともに、忘られてしまふ……そんな空しいやうな美しさのあるところが、かへつて僕などには

まあ、君の詩集のことは今はこの位にして置いて、そのうちゆつくり批評をしよう。ただ一ことだけ言つて置きたい。君は好んで、君をいつも一ばいにしてゐる云ひ知れぬ悲しみを歌つてゐるが、君にあつて最もいいのは、その云ひ知れぬ悲しみそのものではなくして、寧ろそれ自身としては他愛もないやうなそんな悲しきをも、それこそ大事に大事にしてゐる君の珍らしい心ばえなのだ。さういふ君の純金の心をいつまでも大切にしておきたまへ。



この頃君の寄こす手紙は、そんな詩をいい氣持で書いてゐた學生の頃とはだいぶ異つて、すこし不安で苦しうだが、さういふ粗野な現實に辛抱よく耐へてゐる君の姿が手紙のうちにもだんだんしつかりして來るやうに見えるので、大へん嬉しい。詩作などのことについてだつたら、ともかくも、そんな生活の上の助言などは僕にはとても出來さうもないからね。又、さういふものは、それ自身としてどんなに立派な助言だらうと、いかに空しいものか！——僕は

こなひだ京都に滞在してゐたとき、或日、獨逸文化研究所にO君を訪ねて行つたことがある。

O君はまだ來てゐられなかつたので、僕はしばらく大きな應接間で一人きり待たされてゐた。

——僕はそこでぼんやりと煙草を二三服したのち、何氣なく傍らの卓子の上に置いてあつた獨逸の新聞の束を手にとつて、ばらばらとめくつてゐると、それへ毎號繪入小説を連載してゐる作者の名前がどこかで見覚えのあるやうな氣がしてきたが、そのうちその小説の第一回の冒頭にその作者のことが寫眞と共に小さく紹介してあるのを見ると、それはリルケがあつた有名な手紙を書いて與へた往年の若き詩人——フランツ・クサヴェア・カプスなんだ。あのカプスがいまはこんな繪入小説を書いてゐるのか、と僕はしばらく自分自身の眼を疑つた。が、まさしくカプスだ。もつとも、あの「若き詩人への手紙」の序文のなかで、カプス自身、生活のためにリルケが彼に踏みこませまいと氣づかつてゐたやうな領域へいつか追ひやられてしまつてゐるのを嘆いてゐたことを讀んで知つてはゐたが、——そのカプスのその後の消息については僕は何も知らず、又何も知らうとはせず、それきり世に知られぬ生活の中に埋もれてしまつたのだらう位に想像してゐた。そんな方がかへつて、リルケにあんなに好い手紙を貰つた若い詩人の

悲劇らしく奥床しいと考へてゐたが、そのカプスがいまはこんな仕事をしてゐるのか、と思ふと、僕はそれを拾ひ読みをして見ようなんていふ好奇心すら起らず、ただなんだか胸の痛くなるやうな氣がしたばかりだつた。

そのうちにO君が漸く來たので、それを見せるとO君もそれを知らずにゐて、一驚して讀んでゐたが、そんなカプスのことから僕達の話はいつかリルケの方に移つていつた。僕なんぞよりもずつとよくリルケを讀んでゐるO君にいろいろな話を聞いてゐるうちに、自分のリルケの本といへば殆ど全部其處に置きつ放しにしてある山里の方が變になつかしくなつて、僕はなんだかかうやつて京都や奈良をぶらぶら歩きまはつてゐるのが悔いに似た氣もちさへし出してきて仕方がなかつた……

**

その山里に、かうして又、漸つと歸つてきた訣だ。毎夏のはじめに此處の原野に群がつて咲く、君の好きなユウスゲの花はほつぽつと咲き出してゐるけれども、いつもそれに食ひ入るや

うに見入つてゐた君の靜かな姿のそれと共に見えないのが何處やら物足りない。……すこし病氣の野村君はもう僕よりも先きに來てゐて、僕を待ち侘びてゐた。しかし思つたより元氣がよささうだ。夕方、よく二人きりで、村はづれまで散歩に行く。この冬、わざわざ僕の頼んだ空氣銃を自分で持つて來てくれて、一しよに雪の深い林のなかを兎の足跡を追つたり、此處の村はづれで偶然僕達の頭上に落ちてきた傷いた雉子をつかまへて、それをその晩二人で面白半分食べてしまつたことなど、そこいらの草の中に坐りながら、話し合つたりする。あれから間もなく病氣になつたので、その祟りだらうと僕がからかふと、獲つたのはいいんだけど、あれを食べなければよかつたんだと、野村君はすこし氣まり悪さうに笑ふ。——その夕方も、又雉子の祟りか、野村君だけ^{おま}にやられて、足を腫らして、すこし參つたやうな顔をしてゐたよ。

それから去年レムブラントの論文を書きに來てゐたK君の友達で、M君といふのが、今年ドラクロワの論文を書きに來てゐる。やつぱり立派な畫集をどつさり持つて來てゐる。去年の夏はK君の持つてきてゐたレムブラントの畫集を片つ端から自分の部屋へまで持つて來て楽しんでたが、この夏もひとつその流儀でドラクロワを楽しんでやろうかと、蟲の好いことを考へて

ゐる。

**

こんなことを書いてゐたら、あの去年の夏ぢう見て暮らしたレムブラントのさまざまな繪がはつきりと心に蘇つてきた。よく君たちが、緑の木蔭にねころんで喋舌り合つてゐた傍らに、僕だけ一人すこし離れて、やはり同じやうに寝ころびながら讀んでゐたモオリアックの「蝮のとぐろ」の幾つかの情景が、そのレムブラントの繪と混んがらかり合ひながら。……さう云へば、僕はまだ覺えてゐる、シャルル・デュ・ボスがモオリアック論の中でその「蝮のとぐろ」の結末の美しさを説くために引用してゐたフロマンタンのレムブラントの「善良なるサマリヤ人」についての批評を。——「もう日暮れだ。すべてのものは影の中にあつて、ただ、黄昏の単一な靜謐に領せられてゐる畫面の上をあらゆると移動してゐるやうに見えるほど、いかに移り易く、氣まぐれに、軽くそつと置かれてある、二三の微光が揺曳してゐるのみである。……」

さういつた内部より發して、外部にまで輝やき出づるところのレムブラント光線、さういつた「揺曳する微光」を、僕はそのモオリアックの小説の中にもいかに愛してゐたか？ その「蝮のとぐろ」の恐ろしい主人公は、いつも自分自身の外にばかりゐて、彼の家族を苦しめ、憎悪によつてのみ生き、その憎悪の裡にのみ自分の存在の意義を見出しながら老年に達する。——しかし、彼は遂にその憎悪にも死に遅れるほどいたく年老いて、或日、目さめる、彼が誤つて自分はそんな人間だと信じ切つてゐたものから本當の自分自身に目さめる。……

その最後の三章ほどの、レムブラントの或種の繪にそつくりなやうな、何とも云へず莊嚴な美しさ！ その夏ぢう、僕はそれにすつかり魅せられて、身の程知らずとは漸つとあとになつて氣がついたが、自分もさういつた何とも云へず美しいレムブラント光線をもつたやうな小説が書きたくて、毎日々々、この村で自分の見聞する乏しい材料を土臺にして、いままでの僕の小説には似ても似つかぬやうな物語の筋を立てては、やがて力及ばざることを知つて、自分から壊してゐた……

が、いまの僕にはすぐにそんな小説が書けさうもなくても、まだすつかり諦め切つた訣ぢや

ないんだよ。そのうちにきつとそんなのも書いて見せる。どんなものを描くかはまだ一向見當がつかないが（しかしその小説の基調となるべき雰圍氣のやうなものはいま言ったやうなものさ、——さういつたやうなものから一つの小説が次第に形をとりだすのを辛抱強く待つてゐるのが僕の小説作法だ。これだけは君に白状してしまふ）その物語の舞臺は、誰に何と言はれようとも、いま僕の住んでゐるこのへんの山麓の小さな村、何度も何度もこれまで僕が自分の小説に使つたのと同じ村にするつもりだ。

けふ偶然に届いたモオリアックの日記を手にとつて見てゐると、彼がその大部分の小説の舞臺に使つたマラガアル地方の風景のことだの、それに對する彼の偏愛だの、又、その地方の實際の風景は小説のそれとはだいぶ異つてゐることだのを率直に語つてゐる頁に出會つた。さうしてその何處へいつても葡萄畑の果てしなく續いてゐるやうな田舎の風景を、いまこそ生地のまま描いて見せながら、何度自分はこの「夏がその熱を測量させる」平原を描いたか！ とモ

オリアックは云ふ。ここかしの屋根の上や葡萄畑の上の煌めき、麻痺したやうな沈黙、それらすべてのものは「それ自身」存在してゐるのだらうか？ 自分は自分の愛してゐた人達、自分の發明した人達を通してそれを見つめてばかりゐたので、この風景は自分にとつては人間的な、餘りにも人間的なものになつてしまつてゐる……

「が、どうにもしやうがない！ 私は敢へて自分の考へるところを言はう。——この風景こそは、自分の眼には世界中で一番美しいもの、生き生きとした、まるで同胞のやうなもの、私の知つてゐることは何でも知つてゐる唯一のもの、私がもう誰にも語らうとはせぬ滅びた顔をもまだ覚えてゐる唯一のもの、さうして夕方、酷熱の日の後などは、その風が神の被創造物の生氣のある、熱い呼吸でもあつて、まるで母に抱かれてでもゐるかのやうだ。おゝ、息づいてゐる大地よ！」

さういふフランスのマラガアル地方とは、凡そ風景が異ふが、この僕の（君はそれはまた私のですと言ひたいところだらうね？）山麓の小さな村々に就いて、前者におけるモオリアックの場合と同様、それとそつくり同じやうなことを僕は（恐らくは君も亦）どんなに言ひたいだ

らう。

軽井澤へは数日前室生さん達を迎へに行つたとき一遍行つたきりだ。あちらに一泊してきたが、いつものやうに早朝に起きると僕は一人でぶらつと櫻の澤の林道の方へ散歩にいつた。さうして僕は今年の夏になつて始めて、例の口笛の嫌ひな、すこし被害妄想狂の、しかし好人物らしいストリンドベルク氏に出會つた。(君も知つてゐるだらう。)去年とそっくり同じ姿で、相變らず毛の茶がかつた、小さな犬を引張つて、帽子もかぶらず、ステッキを突いて、すこし背中を曲げながら、とつとつと向ふから歩いてきた。僕はなんだか氣輕にお辭儀でもしてちよつと好意を示したいやうな誘惑を感じながら、しかし黙つてそのまま、彼とすれちがはうとした矢先き、ふいとその老外人の連れてゐる茶色の犬が頭に小さな怪我をしてゐるのを見つけて思はず心持ち身をこごめながらその頭へ手をやつて、

「怪我をしてゐますね？」と相手の顔を見上げながら、その言葉が通じようが通じまいが、構

はずに口をきいた。はじめて口をきいたのである。

「……………」ストリンドベルク氏は強さうな近視眼ごしに、しばらく怪訝さうに私の方を見つめてゐた。

「かはいさうに……………」と私はそれから目をつとそらせて、今度はひとりごとのやうに言ひながら、そのまま二人の間には何事もなかつたやうな顔をして、その老外人と犬から離れて行つた。さうして、數歩行き過ぎてから、ひよいと後をふり向いて見ると、老人はまださつき姿勢のまま、私の方を、いかにも好意に充ちたやうな眼つきで見送つてゐた。

さう、私は君に言ふのを忘れたが、ストリンドベルク先生は最近この櫻の澤のすつと奥になる、「幸福の谷」に住んでゐるんだ。

それから僕はそのストリンドベルク先生が昔住んでゐた、村のすつと西方にある「匈奴の森」のことを思ひ出して、つい遠いのでひさしくあの森の方へは行かなかつたが、今はどうなつて

ゐるかしらと思つて、朝食後、朝巳ちゃんを誘つて、一緒に自轉車に乗つて行つて見た。本當にひさしぶりでその森を見たが、こゝもすこし昔とは變つた。その森の入口に近いところまで、日本人の新しい別荘なんぞが出来てゐて厭だつた。しかしまだその森そのものは美しい。ともかくもまだ輕井澤には美しい森があるやうだ。そんな森の中に、君に小さなヒュッテを建てて貰つて、「喬木林」や「晩夏」の中でボヘミア地方の美しい森を隅から隅まで描き盡したアダルベルト・シュティフテルのやうな物語でも書きながら、靜かな晩年（自分の晩年としては僕は自分が三七八になる頃を考へてゐるんだ、なんだかすこし氣が早いやうだが、いまの僕にはそんな感じだ……）を送りたいとそんなことを僕に空想させるやうな、美しい森が、何んといつたつて、すこし奥深く行きさへすれば、まだまだ輕井澤にはあるやうだ。

さう、もうこのへんで筆を置いた方がよからう、詩集のお禮が、とんだものになつてしまつた。下らないことをいい氣になつて書いてしまつたが、最後の森のなかのヒュッテの空想は、本當に偶然だが、いい思ひつきだつたな。これで、どうやらまあ建築事務所宛にこの手紙を出す口實が見つかつたと云ふやうなもの。

一九三七年

牧歌

恩地三保子嬢に

あなたの、お父さんの雑誌に書けといはれた隨筆でも書けたら書かうと思つて、かうやつてけふも森の中へ、例の大きな drawing-book をかかへて、來てゐるのです。僕の住んでゐる屋根裏部屋なんぞにくすぶつてゐるより、森の中でもぶらぶらさ迷つてゐるときの方が、すつといい考への浮ぶのは當然。しかし僕も頭が悪くなつたせゐか、せつかくい考へが浮んでも、そばから物忘れをしてしまふので、（ひとつにはそんな ephemeral なものしか考へられないからかも知れないのですが、）この頃はかうやつて繪描きのやうな眞似をして、その場ですぐそれを書きとめて置くのです。

けふは浅間登山道を僕は眞直に登つてきた。——實は今朝、まだ霧のふかいうちに、僕は半分睡氣さましに、この山道の入口のところまで歩きに來たら、丁度そのとき霧のなかに大きな牝牛を一匹放したまま跡に歩かせながら、黙々と山に登つて行つた、三人のリュックを背負つた山人夫達を見かけたのだけれど、その後ろ姿が僕には何とも云へずなつかしく見えたのだ。——それよりすこし前のこと、僕が霧の中にもちらちらと花のほの見えてゐる馬鈴薯畑を前にした、一面にクロオヅアの茂つた、やや斜へになつた小さな空地のところへさしかかると、いつもはそこに二匹の山羊がつかつてゐるところに、その姿は見えず、その代りに思ひがけず大きな牝牛がひとり草を食べてゐた。おまけに放し飼ひにされてゐる。こりあてつきり何處かの農家の牛が自分で縄でも切つてこんなところまで草を食べに來てゐるのだらう位に思つて、そこから僕はすこし後退りしながら、それをぼんやり見てゐると、僕のそばを三人のリュックを背負つた三人の男達が黙々として通り抜けて行つた。さうしてそのまま馬鈴薯畑のはづれまでいつて、そこから向うの霧にすつかりぼやけて見える森の中へはひりかけようとしたとき、その男達の一人がちよいと振り返つて、何か聲高に叫んだ。——すると、いままで無心に草を

食べてゐた牛がふいとそれを止めて、いそいでその空地を離れて、すんすん三人の男のあとを追つていつた。その間もときどき思ひ出したやうに、道草だけは食ひながら、しかしいかにもいそいそと彼等のあとについて、だんだん霧の中に彼等と一緒に見えなくなつて行つた。なんだ、山人夫達が山へ木樵りにでも行く傍ら、飼ひ牛に山の草を食べさせに連れて行くのか、と漸つと僕には分かり出した。しかしその一瞬の光景は僕には忘れ難い印象を與へた一枚のセガントイニばりの繪にちがひなかつた。……ついさつきまで、全然離れ離れになつて見えてゐたそのリュックを背負つた山人夫と、無心に草を食べてゐた牛とが、急に思ひがけずに結びついて、一枚の牧歌的な繪になつた、その刹那の美しさは、何ともかとも云へずに具合がよかつた。ああいつたものが何とか文章にならないかなあ、と思ひながら、——僕はいま、その森の入口から、そこからすぐ左に折れて行けばあなた達のヒュッテのある、すつとなだらかな道へ出られるものを、眞直にその山道を呼吸を切らしながら登つて行つた。もう十時にも近く、すつかり霧が上つて、森の上には眞夏の日が領し出してはゐるが、いまだに朝霧の中で見かけた例の三人の姿が俤に立つやうな思ひで。……

やあ、ここは寝ころがつてもものでも書くのには、もつてこいの木蔭だ。丁度おあつらへ向きに、その下生えの間には、例のイブキジャカウサウも一かたまり咲いてゐる。どれ、ここで一つきり横になつて何か思ひついたままに書いて行つてやらうと、僕は自分の前に大きな drawing-book を擴げた。

丁度きのふの今時分、あなた達と四人で、身を横たへてゐた木蔭には、やはりこのイブキジャカウサウが、もつともつと一面に咲き亂れてゐた。その一群の花を四方から取り圍むやうにして、四人が四人とも思ひ思ひに足を投げ出して、他愛もないことに笑ひ興じてゐたつが、僕達の知らぬ間に日影が移つて、一番端近くにゐた僕の肩が一ぱい日を浴びてゐるのに漸つと氣がついて、僕達が立ち上つた時まで、それは本當に愉しい一時だつた。あの一と時こそ、僕達自身もまた、マネエの草上の何とやら云つたやうな美しい畫中の人物になり切つて居たのではないのか知らん？

きのふも僕は、この大きな drawing-book をかかへて、何處かへ寫生に行かうと思つて、村はづれの方まで歩いて行くと、村の中ほどの一軒の農家の前であな達三人が寄り添つて、何かその古びた家を眩しさうに見上げてゐるのを認めた。

「何を見てゐるんだい？」と僕はあなた達に近づきながら、ぶつきら棒に訊いた。

「ほら……」と、あなたがその蠶室になつた二階から一部分見えてゐる盛り上つた桑の葉を指して、「……あの蠶を見てゐるの、まだあんなに小さくつて、可愛い……」

「なあんだ、蠶を見てゐるのかい？ あたらこの好い天氣にそんなものなんぞ見てゐたつて仕様がな。……これから僕は森の中へ寫生に行くんだけど、君達が邪魔をしないのなら、一緒に來たまへ。……この村で一番美しい森を教へてやるよ。」

「何處？」

「村はづれから少し向うの、誰も行かないやうなところだが、そりあい道だぜ。……そこか

ら見える浅間山の姿は飛切り上等だし……その森の近くには小さな牧場までもあるしさ。」

「小川もある？ この村ぢや水に渴ゑてゐるんだがな……」と、こなひだ自轉車から落ちて、まだ脚に繻帯を巻きつけてゐる、あなたの連れの一人がいかにも頓狂に訊いた。面白い女學生らしい。

「ああ！ 綺麗な小川だつてあるとも！」と僕は得意さうに返事をした。

その小さな牧場や小川のあるところまで行く途中であつた。やつと一人だけ通れるやうな芝の生へた小徑を、森だの野だのを横切つて、四人が後になり先になつて歩いて行きながら、その徑の兩側にいまを盛り咲いてゐる、さまざまな植物の名を、僕は自分の知つてゐるだけ、

——のみならず本當によく知らないのまで、知つたふりをして口から出まかせに、あなた達に言つて聞かせてゐるうちに、さつきからあちらに一かたまり、こちらに一かたまり、簇がつて可愛らしい小さな花を咲かせてゐるのが、どうもその名を昔教はつて知つてゐるくせに思ひ出せずにあつたが、——とても綺麗にその花が、一面に咲きみだれてゐる、いかにも涼しげな緑の木蔭があつた。

「これは何だつたつけなあ？ さつきから思ひ出せさうで思ひ出せないんだがなあ？」と僕はその前にしやがんだ拍子に、ぶんと好い匂がして、「やつと思ひ出せたぞ。これはジャカウサウだ。……え、何んでいつたつけな、何とかジャカウサウ……さう、さう、イブキジャカウサウさ。」

「これがジャカウサウ？……、うん、ちよつと好い匂がするな」と、あなたはまだ半信半疑ですこし身を踴めながら、それを一本採ぎとらうとすると、そのしなやかな莖はしかし思つたよりも長い蔓になつてゐてそれからそれへと絡らみ合つてゐた。

その時突然、「ここいらですこし休まうよ」と、例の自轉車娘がいつて、眞つ先にその花のそばに繻帯をした足を出した。そのそばに、あなたも同じやうに足を出した。僕もあなた達から少し離れて、端近くに横になつた。一番最後に、いつまでも僕達のそばに立つたままそれを一本採ぎとつて手でいぢつてゐた、もう一人の大人寂びた女友達も、とうとうその花の傍らへ腰を下ろした。——それから二十分間ばかり、そのイブキジャカウサウを取り巻いてあなた達が他愛もないお喋りをし合つてゐるのを、僕はすこし離れて、例の drawing-book は脇に投げ

出したまま、手枕をして寝そべりながら、ぼんやりとチェリイを吹かしてゐた……

ほんたうに静かな森の中で、私達の頭上に近い枝の上で四十雀が二三羽絶えず啼きかはしながら蟲を拾つてゐるつきり、——ひよつとしたらその邊の木の枝まで栗鼠でも出てきさうな氣さへする。あいつが出てきたら、一層あなた達を愉しくはしやがせたらうに、とうとう彼奴きやつは見參に及ばなんだ。いつものことながら、おれの天使栗鼠の奴の、氣のきかないのには呆れる。……

しかし、そればかりぢやなかつた。僕がわざわざあなた達を連れていつて見せようとおもつた、小さな牧場は、去年の秋まではそれでも牛が二三匹柵のなかでおとなしく草を食べてゐたのに、今年は雜草ばかりが蓬々と伸び放題に伸びてゐて、牛なんぞは影も形も見えなかつた。

——だが、最後に漸つとほつとしたのは、その空つぽの牧場のすこし先きの小川が、その上にあぶなつかしく架つてゐる木橋の上から覗いて見ても、一面に青々と繁殖した野芹にすつかり隠れてしまつてゐて、唯、氣持のいいせせらぎの音を立ててゐるきりで、その水の色さへ見せなかつたことだ。實はそこを流れてゐるのは、火山の中腹から湧いて出る血の池から流れ落ち

てくる、見ただけでもぞつとするやうな、無氣味に赤濁つた水だつたからな。

**

明朝はもうあなたはこの村からお歸りになる。そのときお父様へのお土産にと思つて、僕は一所懸命にせつせと書いたが、とうとうこんなつまらないものを書き上げた。

唯、最後にすこしはましな土産になるかと思つて、書き添へるけれど、實はきのふあれから歸つて同宿の植物に精しい友人をつかまへて、あなた達に知つたかぶりをして教へて上げた植物の名を一々訊き正して、置いたのだ。僕の教へて上げたなかで、クロオヅアの花に似た車軸草、ちよつと松蟲草みたいなヤマウツボ、それからこのへんにさらに咲いてゐるニッコウキスゲ、ホタルブクロなんぞは僕も間違つちやゐなかつたが、あとは殆ど全部出たらめであるの自轉車娘がサロメチルの匂がするといつた、鹿の子のやうな花はシモツケ、それから莖までがオイランサウの花のやうな紅色をしてゐるのはヤナギラン、梅鉢草に似て淡紫の花はタチフウロ、といふのださうだ。——まあ、こんなこの村の植物の名前でも覚えて行つて、お父さん

に教へて上げて下さい。ぢやあ、御機嫌よう。秋にでもなつたら、皆さんと一緒にまたヒュッテへでもいらつしやい。恐らくそのときもまだ僕はこの村に一人きりで頑張つてゐるでせうから。

一九三七年八月六日、追分にて

初秋の浅間

この山麓では、九月はたいへん雲が多い。しかし夏の近づく頃の雲の不活潑な動きとは異なつて、白い、乾燥した、動きのいちじるしい雲の塊りが不連続的に通り過ぎる度毎に、何かそれらの雲とともに一剝されでもしたかのやうに、そのあとで青空はいよいよ本物の青色に近づいてゆく。——さういふ雲のたたずまひが、とても好い。林のなかの空地などに寝そべつて見てゐると、さういふ雲は絶えず西から東へとときどき日かげを翳らせながら流れてゆく。

さういふ雲のなから、浅間山もたえず見え隠れしながら、ときどきその全貌をすつきりと爽やかに見せたりする。山肌はいよいよ黄ばみ、夏などもつと多いと思つてゐた煙りが、思ひがけず、殆どあるかないか位にしか立つてゐなかつたりする。——が、さういふ時くらゐ、浅間山が魅惑的に見えることはない。日がばあつと當つて、それがまだ何物をも温めてゐない、もうかなり肌寒いやうな朝など、起き抜けにふところ手をして山を見に出ると、そんな朝は浅

間はきまつて雲ひとつない山肌を冷え冷えと見せてゐる。その山肌一めんじに日が赤あかとあたり出すのを眺めてゐると、山自身が見る間に淡い雲を湧き立たせ、ヴェイルのやうに漂はせ、だんだんそれが濃くなつていつて、しばらくする裡に自分自身を半分以上その雲のなかに隠してしまふ。それから終日、そのなかに見え隠れしてゐる。

そんな浅間山に憑かれたやうになつて、放心したやうにふらふらと山へ入つていつて死んだ人もあるといふ。——さういふ話を、私は數年前はじめて追分へ来て長い滞在をした秋に、宿の主人から聞いた。丁度その前年の、同じ九月半ばのこと、——一週間ほど前から、關西の方からふらりと來た一人の滞在者があつた。快活さうな男で、浅間山をはじめ見て來て、どうもかうも仕様のないくらゐ好きになつて、毎日恍惚惚れと山許り見て暮らしてゐたやうだつたが、とうとう或る朝一人で山へ登つてくると云ひ出した。主人に一人ぢやとても行けませんからと云つて止められたので、それは思ひ止まつたらしかつた。その代り、途中の血の池まで行つてくると云つて、それまでの道筋を主人に聞いて、寫眞機だけ手にして出ていつたが、それがさあ夕方になつても夜になつても歸つて來ない。宿では騒ぎ出し、翌日から村では搜索隊を

出して捜したがとうとう見つからずじまつた。——その男らしい死骸の見つかつたのは一月位たつてからで、佛岩の崖に落ちてゐたといふ。寫眞機も一しよにあつた。その寫眞をそのあとで現像してみると、まだ使つてゐない二三枚を除いては、みんな浅間の寫眞で、最後に撮つたやつには、初秋の、白い、さはやかな雲だけが映つてゐたといふ……

**

さういつた凄さを何處かその底にもつてゐる山だが、その浅間も、追分の供養塔などの立ち並んだ村はづれ——北國街道と中山道との分^か去^きれ——に立つて眞白な花ざかりの蕎麥畑などの彼方に眺めやつてゐると、いかにも穩かで、親しみ深く、毎日見慣れてゐる私の裡にまでそこはかとなない旅情を生ぜしめる。往昔、遠く中山道を御代田の方から上つてきた旅人がやつと追分まで辿りつき、宿へのはひり口で、いかにもほつとした氣持であらためて浅間山をしみじみと見なほした數百年の感慨が、いまだに此處いらぢうに漂つてゐて、私達のけふの感情をもそれとなく支配してゐるのかも知れない。そんな氣もされる。

去年の九月も末近い頃、朝から午過ぎるまで、この馬頭観音などのある村はづれの、昔のままに残つてゐると云はれてゐる、一本の古い松の木かげに、晝架を据ゑて、いかにも愉しうに水彩畫を描いてゐた、一見外國婦人と見まがはれるほど、黒づくめの洋装の身についた、日本人の一老婦人がゐた。その傍には、中年の日本服をきた婦人がつきそふやうにして、編物をしてゐた。

偶然その朝そこまで散歩にきた私は、しばらく邪魔にならぬやうなところに立つて、その由緒ありげな老婦人のいかにも朗かさうな氣分で繪を描いてゐる様子を、私自身まで何か楽しくなりながら見物してゐた。

その午後、私が晝餉をへた時分、隣室に客が通されて、物靜かな老婦人らしい話し聲がした。隣室とはいへ、私の居間になつたお小姓の間からは、疊廊下と控への間とを隔てた、大名の泊つた上段の間だから、話し聲は殆ど聞き分けられない。しかし、さつき村はづれで繪を描いてゐた老婦人とその附添ひの上品な婦人にちがひないことは分かつた。

「山羊がこの村にだいぶ飼はれてゐるやうですが、山羊のお乳を頂戴できますか？」さう云つ

たのは附添ひの婦人らしかつた。

「はあ、山羊のお乳でしたら、どこかで分けて貰つて差し上げます」宿のおかみさんが答へてゐる。

「山羊の乳飲めるの、たいへん嬉しいです。私、伊太利でよく飲みました。大へん好きでしたが、——こちらへ歸つてきてから、まだ一度も飲みません……」すこしをかした言葉遣ひで、しかしいかにもこやかな口吻で、獨りごとのやうに云うてゐるのは、その長いこと伊太利で暮らしてゐたらしい老婦人であらう。

私は自分の部屋から出ていつた。隣室で、私なんぞがごそそ物音を立てたりしてゐない方が、この村における二人の珍らしい短い滞在のためにはすべてが好い、——と思つたからである。

その間散歩でもして來ようかと思つて、板土間を横切つて行かうとすると、そこにぢかに繪具箱と編物の袋がおかれ、その傍らに大きな紙挟みが無雜作に立てかけられてあつた。その中に挟みこまれてゐるにちがひない、さつきの村はづれからの淺間山の繪が見たかつた。頼んで

見たら、氣輕に見せて貰へたらうが、強つてさうするほどの氣にもなれず、——それほど一人
愉しんで描いてゐたやうな繪なので、——私はそのままおもてへ出た。

宿の前には、向日葵が一本、すっかり枯れたまま、いまだに褐色の實を垂らしてゐる。その
大きな葉は、夏ちう、花を太陽の方へ向けさせてゐたときの剛情な姿勢のまま、ただすこし傾
いて。その枯れた向日葵を、ブルキエルクラ前面に立てて、浅間山は相も變らず自ら湧き立たせた雲のな
かに見え隠れしてゐた。

一九三八年九月十八日

附記。此の老婦人の有名なラグウザお玉さんであつた事を私はあとで知つた。

七つの手紙

或女友達に

—

一九三七年九月十一日、追分にて

お手紙を難有う。私達の仲間のものはもう殆ど此村から引き上げて行きました。さうしてこ
れからは、この小さな村の何もかも、みんな私が一人占めです。

夏の間、みんなでよくおしやべりをしにいつたあの栗の木、——さういふ私達の午後のため
に涼しい木蔭をつくつてゐてくれた、あの栗の木の下に、私は二三日前から一人でもつて本や
紙を一かかへ抱へていつては、そこで山蟻などを殺しながら、本を読んだり、手紙を書いたり
してゐます。こんな事を一週間ほども續けてゐるうちに自分の考へをやをら仕事の方へ向けて
行かせようといふのが、私のいつもの手。——きのふの午後も、今かうやつて貴方に手紙を書

いてゐるこの木蔭に寝ころびながら、私はアベラアルとエロイイズの手紙の事を書いた本に讀みふけつてゐました。あのエロイイズの純粹な場合、——既にもうアベラアルとの間に一人の子までなしながら、妻たらんよりは、戀人たらんことを欲して、アベラアルの求婚を一時斥けようとまでしたエロイイズの心意氣、——それからさういふ二人の戀が世間から攻撃の的となり、遂に別れ別れに修道院に入つてから、數年後再び二人が取りかはすやうになつた手紙の中の、相手を思ひ切らせて神のみに仕へようとしながら、しかも自ら相手を思ふのを禁じ得ずして惱みもだえる彼女の切なげな姿、——さういふエロイイズの歎かひが、數世紀後、その中に再び同種の小禽の叫びのやうに認められる、あの葡萄牙尼の苦しげな手紙、——そんな昔の不幸な戀人たちの残していつた手紙だとか、或は日記だとかを、私はこの頃その一つを殆ど身から離さない位にしてまで讀みふけつてゐるのです。

實を云ふと、私はこんどの仕事には、さういふ手紙や日記を残していつた昔の不幸な戀人たちの一人を取り上げて見たいのです。さう、まあ王朝時代のものなら申分ありませんが、その頃の不幸な婦人たちの残していつた多數の日記や家集のうちに、それを私がちよつと換骨奪胎

しただけでそのまま私の好みの物語になつて呉れるやうなものがありはしないか知らん？ そんな日記や家集の中で、彼女たちの涙ぐましさの中からちつと我々を見つめてゐるやうな、そしてそれをしばし手にすることもあつた學者達はそんな目ざしには少しも氣づかなかつたので、反つて我々には、さういふ彼女たちの歎かひがそつくりそのまま、見知らぬ小禽の叫びにも似て、一節々々くつきりと認められると云つたやうなものが、かういふ私のために残つてゐて呉れさうな氣もします。これから一つさういふ日記や家集やらを漁るつもりです。（大體もう二つ三つ見當をつけてはゐるのですが……）

末筆ながら、私の健康のことをいつも御心配下すつて難有う。しかし、山梔子嬢の手紙に貴方が身體の弱いのに無理ばかりしてゐるといつて氣づかつて來ましたが、かうやつて山の中で氣ままにしてゐる私はともかくも、本當に貴方こそ無理をなすつてはいけませんね。何處か靜かなところへでも行つて、しばらく御養生なさるといい。弟さん達によろしく。そのうち空氣銃でもつて雉子でも打つたらお送りすると言つて下さい。

九月二十三日、追分にて

貴方は本當に好いときにお手紙を下さいました。貴方が何處かの海邊に行つていらつしやるとの事、一週間ばかり前に山梔子嬢くちなしからいただいた手紙で知つては居ました。誰にもその行先を知らさず、何處かへすうつと行つてしまつてゐるなんて、いかにも貴方のなさりさうな事だとは思ひましたけれど、こんな山にゐる私なんぞ位にはすぐ其處からお便りを下すつても好かりさうなものだと、けふも思つてゐたところでした。

折角お貸ししたが、そんなものを讀んでくれるかどうかと思つてゐたユウジエニイ・ド・ゲランの「日記」、そちらへ持つていつて毎日讀んでいらつしやる由、大變うれしく、「この日記には思想も感情も苦痛もこんなにある。何んと人を夢みさせ、反省させ、生活させるものではないか。いはば、忘れてゐる或メロデーに何故かしら胸がゆすぶられて来るやうに、それは自分の裡に郷愁のやうなものを起させる」といふアミエルから貴方がお手紙の中に引いて來られ

た言葉はいかにもこの日記に向はれてゐる貴方自身の靜かな姿を私に偲ばせてくれましたが、私はこの日記にはもう一種の愛讀者のある事——その愛する弟モオリスのために彼女自身は空しい生涯を送るのにも甘んじたこの美しい魂に對して思はず美望の聲を洩らしたリルケのごときものゝある事をも、貴方にお知らせして置きたい。最近機會があつて、この日記に就いて書いてゐるリルケの手紙を讀みましたが、その晩年の苦しい年月の間、彼を支へるべく彼のために生きてくれるやうな、そしてその人の許に彼の孤獨な生を避難させてゐられるやうな者を求めてやまなかつたリルケにとつて、この日記がどんなに貴重なものに思はれたか、——私自身はまだ孤獨なんぞと云ふものがいかに手きびしいものだから殆ど知らぬも同様でせうが——そのリルケの美望に近い氣もちは私にもいささか分かるつもりです。

それはさて、貴方がその弟思ひの聖女の日記に親しまれてゐる間、私は私でそれとはおよそ反對な運命の下におかれた、女としての苦しい思ひのありつたけをした一人の女の日記のために、心に奪はれてゐました。それはこの前の手紙でお話したやうな、こんどの仕事のために、私がやつとあまたの王朝時代の日記の中からこれこそと思つて選んできた「蜻蛉日記かかげの日記」といふ、

さういふ古い日記の中でも最も古いとされてゐるものの一つです。

私の前に現はれたその「蜻蛉日記」といふのは、あの「ぼるとがる文」などで我々を打つものに似たものさへ持つてゐる所の、——いはば、それが戀する女たちの永遠の姿でもあるかのやうに——愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつけ、その求むべからざるを身にしみて知るに及んではせめて自分がそのためにこれほど苦しめられたといふ事だけでも男に分からせようとし、それにも遂に絶望して、自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求めるに至る、不幸な女の日記です。

「唯生きて生けらぬと聞えよ」——さう、生きた空もないやうな思ひで男に訴へつづけた歎かひにも拘らず、彼女があゝの葡萄牙尼同様に、「いと物はかなく、兎にも角にもつかで」、いたく年老ゆるまで生きながらへてゐたらしい事、しかし彼女らの死後さういふ皮肉を極めた運命をも超えて彼女らの生のはげしかつた一瞬のいつまでも赫きを失せないでゐる事、常にわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである事、——「風立ちぬ」以来私に課せられてゐる一つの主題の發展が思ひがけず此處において可能であるかも知れないのを見、私は何か胸がわく

わくするのを感じてゐる位です。

が、それだけにまた一層悔やまれるのは、この仕事を前にして、私の身體がいまあまり好いコンディションに置かれてない事です。恐らく氣候の變り目のせいで、こんなに元氣がないのでせう。きつと氣候が落着いたら、すぐ恢復することと思ひます。こんなにくぢのない自分を元氣にさせるためにも、貴方の手紙は本當に好いときに來てくれました。それからそれと一緒にあのユウジエニイ・ド・ゲランの「日記」も。いま、貴方がそれを讀んでいらつしやると聞いて、急に自分の傍にも生き生きと蘇つてきたやうな氣のするあの「日記」の筆者みたいな、さういふ好い姉をたとへ自分もたすともさういふ人のこの世に居たといふ事だけでも、何かそれに似たものにまで私を郷愁させ、それだけでも暫くなり私を支へてくれるものがありま

すからね。

三

十月二十三日、追分にて

お手紙を難有う。それから、あの大好きなマロン・グラセなど、いろいろとおいしいお菓子を。

もう御元氣になられて東京でお暮らしの由、結構でした。私は相變らずこちらで仕事に没頭してゐます。こちらは今、とてもすばらしい秋日和です。本當にこんな立派な秋を一人占めにしてゐるのは何んだかもつたないやうだと思つてゐましたら、一週間ばかり、女子大の生徒たちが十四五人でヒュッテにやつて來ました。まさかその中にくちなし嬢がゐるとは思はなかつたので、私は少年みたいに首まであるジャケットなんぞ着込んで仕事をしてゐましたら、或日、突然みんなで押しかけてきて私に油屋ぢうを案内させました。私はまるで自分の家みたい、ジャケット姿のまま、昔殿様の泊つた上段の間だの、遊女の名なんぞ一ぱい落書してある壁だのを見せて歩きましたが、一番最後に、いま私の使つてゐるお小姓の間に案内したところ、部屋中一ぱいに散らかした本だの、書きかけの原稿だのをみんな珍らしがつて、いつまでも見てゐられたのは冷汗を掻きました。貴方の送つてくれたマロン・グラセがまだ箱の中に二つ三つ残つてゐるまで覗き込んでゐたやうでしたが。——すでに追分のこの秋のすばらし

さ、それから私の精進ぶりなど、くちなし嬢が歸京して逐一貴方にも報告してゐるとは思ひますが……

私の仕事、まあどうか一通りは出來上りかけてゐますが、いまになつて、私のこんな長い間の努力が或ひは空しかつたのではないかと云ふ氣がし出してゐてなりません。しかし、どつち途、もう遅い。——大體、こんどの仕事のテキストとした「蜻蛉日記」なるものは、一讀過の印象は、いかにもひたむきな作者の痛々しげな姿にもかかはらず、何か變にくどくどとしてゐて、いつもおなじ歎きばかり繰り返してゐるやうに見え、どちらかと云へばあまり感じのいいものではないのです。そこでもつて、私はこの日記の本質的にもつてゐる好いもの、例へばあの「ぼるとがる文」などのそれにも似たもの——さう云ふ切實なものだけをそつくりそのまま生かしながらその日記全體をもつと簡潔にして、それに一種の小説的秩序を與へ得たら恐らくすつと我々に近いものになるだらうと信じてゐたのですが、私はその代償としてこの日記そのものの獨自性をも危険にさらさなければならぬ事にはさまで深く思ひ及ばなかつたのです。——ところで、この「蜻蛉日記」に於いては、作者はその折々の苛ら苛らした氣もちをその折

折の氣もちのままに構はずに誇張し、その前後の記事などに少し辻褃の合はない事があつても一向意に介さない、——言つて見れば、この日記の作者はすべてを論理的秩序 (logical order) によつては書かずに、心理的秩序 (psychological order) によつてのみ書いてゐる、——其處にやはりこの日記独自のちやんとした統一がおのづからあつて、それをも生かさうとすると、もはや私の手を入れる餘地なんぞは何處にもない位なのです。いつも同じ弟のモオリス、同じ花、同じ小鳥、同じ神様の事を、それをまたいつも同じやうに静かな調子で語つて倦かうとはしなかつた、あのユウジエニイ・ド・ゲランの「日記」にもその點似て、不幸な女の涙ぐましさ、執拗さ、根氣よさそのものの中に、寧ろこの日記を永遠的なものにさせてゐるものがある。と云つていいのかも知れません。——そんな事にどうして私ともあらうものが今まで氣づかずにゐたのか、この頃になつてつくづく、何んだか取り返しつかない事をしたと思ふやうになりました。

が、さういふ矛盾に苦しみながら、一方この仕事が最後に近づけば近づくほど、ますますそれに私を没頭させ出してゐるのは、この作品の結末において漸つとその手に負へない女主人公

が私のものになり出したやうに見える事です。——その女主人公が男のために絶えず苦しんだ餘り、いつかその苦しみなしには自分が生きてゐられぬかと思へるほどになつてゐる、そんなにまで自分にとつてはもはや命の糧にも等しく思へるほどな貴重な苦しみを、男は自ら與へながらそれには一向氣づかうともしない、そんな情知らずをいまは反つて男のために氣の毒な位に思ふ、——さういふ一種の浪漫的反語とでも言へば言へないこともなさうな、自分を苦しめた男をいまは反つて見下ろしてゐられるやうな、高揚した心の状態を、私がその苦しい女主人公のために最後に見つけてやつた事は、この作品を私のものとして世に問ふ唯一の口實ともなりませう。……

のみならず、私は漸つとかうして自分のものになり出したこの不幸な女主人公をこのまま手離したくはない位なのです。私は出来れば引き続きこの續篇を書いて見たく思ひます。さいはひ私がこんどの仕事に使つたのはこの日記の三分の二ばかりで、まだその三分の一がそつくり手をつけずに残つてゐるし、それにその部分の方が小説的なことはすつと小説的ですから、それを大いに役立てて、——こんどの仕事ではいささか物足らなかつた私の小説的欲求をその方

で充分満足させてやらうかと思つてゐます。

この二三日前からといふもの、村中のありとあらゆる木といふ木が殆ど小止みもなしに落葉しつづけてゐます。もう一週間もしたら、本當にこの小さな村はすっかり裸かになつてしまひさうな位。——私はときどき仕事に疲れると、その原稿をもつて近くの林の中へそれを讀みにゆきます。そしてしきりに落葉してゐる中に坐つて、それを讀みふけりながら、頭上でさらさらと落葉の立ててゐる音を聞くとともにしに聞いてゐるのは私には何とも云へない refreshment になるのです。

四

十一月二十五日、輕井澤にて

本當に飛んだ目に逢ひました。こんな山の村で火事に出逢はうなどは、およそゆめにも思はなかつた事です。此あぶらや一軒の火事のために、この村ばかりでなく、近在の村々までそれは大騒ぎをしました。しかし晝火事だったので、怪我人も出ず、僕なんぞは着のみ着のまま

焼け出されたものの、身體には別状ありませんでしたから、御安心下さい。數日前からこちらに来てゐた立原君も野村君も、同じやうに焼け出されました。しかし、運よく「かげろふの日記」だけは脱稿して、雑誌社へ送つてしまつた後だったので、まあ好かつたやうなもの、その續きを書くためにいろいろ取つておいたノートや、書き入れをした本や、それから澤山のルケの本など、何もかも一ぺんに失つてしまつたのはいかにも残念ですが、まあ、この冬中うんと仕事をして、取り返せるものだけでも取り返して見ませう。

いま輕井澤の旅舎に避難してをりますが、この冬ちう或知人の別莊を借りられる事になりましたので、あすからそちらへ引き移ります。一しよに焼け出された野村君もたぶん僕とこの冬をこちらで過す事になるでせう。いまちよつと東京へ歸つてをりますが。——僕はどうもこんなジャケット姿ですごく上京するのも癪ですから、このままこちらに居残つて、小さな仕事を二つ三つ片づけることにしました。

就いては、お言葉に甘えて、貴方に本を一冊御無心します。矢代幸雄氏の「受胎告知」といふ本（この夏、僕のもつてゐたのを貴方もごらんになつたでせう）を何處かの古本屋で見つけ

て送つてくれませんか？ ほら、夏、僕がその本の挿繪を見せながら話したところのあるのを覚えておませんか、村の娘マリアへの告知の天使ガブリエルの不意の訪れ、——そんなのを輕井澤みたいな山村を背景にしてちよつと書いて見たいんだなどと常談のやうに話してゐたのを？——あいつなら、こんな時でも、雑作なくちよつと書けさうな氣がするので、もう一度あの本でも見てやらうかと思ふのです。

十二月になつて、それでも書けたら、二三日ぐらゐ上京するかも知れません。少くともクリスマス頃にはきつと上京します。さうしたら貴方がたにもお會ひできますね。

この夏やはり追分に來てゐた友達の一人から「この夏の美しかったものがすべて失くなつたとは、そのためにすべてが美しかつたやうで悲しい氣もちです」などと書いてよこしました。本當に僕もそんな氣もちになる位。……

けさもちよつと追分の燒跡へいつて來ました。燒け出されたあぶらやの人達、みんな割合に元氣です。來年の夏までには何とか小さなブラックでも建てて是非みなさんに又來て貰ふなどと言つてゐました。しばらく燒跡に立つて僕は、あの火事の日にも吹いてゐたやうな、西から

強く吹きつける、寒い風に吹かれて居りました。そんな風の中に「かげるふの日記」の下書の燒け残りなんぞがまだひらひらと飛んでゐました。

五

十二月一日、輕井澤にて

「受胎告知」其他いろいろとお心盡しの品を難有う。只今受取りました。

僕は先月二十六日、お話した例の別荘に引つ越しました。此處は *Happy Valley* なんぞと外人の呼んでゐる小さな谷の上にある林の中の杉皮葺きのコッテエデ、——林の中とはよく、いまはもうすつかり冬枯れてゐるので、裸かの枝を透いて、下方の高原とそれを四方から遠巻きにした國境の山々、更らにその山向うにもう眞白になつた^{いたゞ}巔だけをのぞかせてゐる八ヶ岳などが、殆ど手にとるごとくに見えるやうなところですよ。……

野村君が數日前やつて來るまで、僕はこんな山のなかに一人きりで暮らしてゐたんですからね、僕もなかなかうきになつたでせう。この頃は野村君と一しよに毎日薪割りをしたり、下

の井戸まで水を汲みにいつたりして、半ば自炊生活をしてゐます。正午頃村の娘さんが御飯だけを炊きに來てくれますが、あとは大抵野村君と二人で代る代るやつてゐます。何分こんな冬の山住ひにはまだ馴れないものだから、それこそ食ふ事と寒さをしのぐ事だけにすつかり氣をとられてしまつて、なかなか肝腎の賣文稼業には手が届きかねます。それにもう一つは、大きなファイア・プレースの中でぼうぼうと音を立てて燃えてゐる火をいい氣持になつて見守つてゐると、知らない間にすんすん驚くほど速く時間が立つてしまふのです。もつとも時計なんぞ二人とも持ち合はせてゐないので、どの位時間が立つたんだか分らないけれども……
とにかくついでこれまで一度も味つたことのないやうなこんな原始的生活を、いまかうやつて二人でしてゐるのは、何とも云へず愉快です。

しかしけさなんぞは、本當をいふと、ちよつと僕には辛かつた。やつと十時頃、温かさうな日がちらつと差したかと思ふと、すぐ眞暗な雲に遮ぎられてしまつて、そしていまにも雪になりさうで、——いつその事さつさと雪になつてくれりあ好いのに、と佛頂面をしてゐると、そこへ思ひがけず貴方から贈り物が届いたので、急に家の中ちう明るくなつたやうな氣がしまし

た。僕がきふに愉しさうに小包をほどき出してゐるのを、傍で野村君がうらやましさうな顔をして見てゐたので、折角のお心盡しの品ですが、その中から奮發してシユテッテルの鉛筆を一本分けてやりました。それからそのついでに二人で有平糖を一しよに頬張りました。

それから僕は早速いただいた「受胎告知」をかかへて、二階の寢室に閉ぢこもり、その本へさあつと目をやつてから、いま、この手紙を書いてゐるところです。これまでは本といつたらこの間ちよつとゐた宿屋から借りてきた聖書が一卷、傍にあるきりでした。まあ、こんな時でなければこんなものを楽しみじみと味ふ機會はあるまいと思つて、リルケの愛讀してゐたと云ふ約百記なんぞを拾ひ讀みしてゐました。

さういへば、日曜日に野村君と一しよにふらつと教會へいつて來ました。(こなひだ大雪の日に二人でその教會の雪をかぶつた美しい尖塔を見上げてゐたら、その神父さんにかまつて日曜の彌撒に來なさいと云はれたので——)御存知の、あのアントニン・レイモンドの建設になる、瑞西の山間の村にでもありさうな、入口に聖パウロの像の立つてゐる小さな教會の方です。教會には獨逸人らしい中年の婦人が一人、黒いマントにうづくまつてゐたつきり、——

ちよつと顔を出すだけですぐ出て来ようと思つた僕達も、入つてみるとさうもならず、小一時
間ばかりも寒い思ひをして、隅つこの藁椅子にかしこまつて坐つてゐました。お彌撒がやつと
すんで、その婦人が俯向きがちに懺悔室らしいにはひつて行くのを見てから、僕達も立ち上
つて神父さんにちよつと挨拶をして出て来ました。さうしたら、その日の夕方、その神父さん
が僕達の山の上の коттеエヂまで、わざわざ訪ねて来たので面喰らひました。やつぱり獨逸人
で、日本に来てからまだ二年目だとか日本語をあまりよく解せないらしく、ずるぶんとんちん
かなな會話を取りかはして歸つて行きました。

もう二三日したらその神父さんも松本へ引き上げられる由、——あの教會がこれつきり閉さ
れるのかと思ふと、ちよつと残念ですが、それでもまあ吻としました。どうもあんな美しい教
會が多ぢう開いてゐたりされると、しよつ中そこへ出入りしたくなつてそのために僕なんぞと
來たら、カトリックにだつて何だつてなりかねませんからね。

今月五日に友人の結婚式があつて、是非僕にも出席しろと云つてきたので、一つそれへ一張
羅のジャケット姿で出席してやらうかと思つたりしてゐます。それまでに何とか仕事の一つで

も片づいてくれると好いんだけど……。なんだかこの手紙を書いてゐるうちに急に、寒くな
つて來たと思つたら、雪がちらちら舞ひ出してゐます。これからこの手紙を出しがてら、少々
食料品を買出しに、ひとりで村まで一走りして來ます。

六

十二月九日、輕井澤にて

例の友人の結婚式にちよつと顔だけ出して、翌朝またこちらへ歸つて來ました。まだ仕事が
一つも片づかないので、ゆつくり貴方がたにお會ひしたりしてゐられませんでした。一人で留
守番をしてゐた野村君は、すこし風邪を引き込んで元氣がなかつた由、——しかし僕が歸つた
ら、忽ち元氣になつて、櫓でもつて僕の荷物を山の上まで運んでくれました。

けさはとても日が温かなので、日あたりのいいヴェランダに焔爐などまで持ち出して、雪に
埋つた林や谷を前にしながら、ゆうべの冷飯をバターでいためて食べました。何しろこの僕が腕
に糞をかけてこしらへるのですから、そのうまい事つたら！ 本當にこの味ばかりは東京なん

ぞにゐて寒がつてばかりゐる奴らには想像もできないでせうね。——丁度そこへ郵便屋さんが登つてきたので（大抵かうやつて食事をしてゐる最中にいつも郵便が届くのも楽しみの一つでず）紅茶を一ぱい御馳走してやりました。けさ届けてくれた郵便の束の中にはこの前貴方に書いたあの松本へ行つたカトリックの神父さんから送つてよこしたパンフレットが數冊はひつてゐました。端書も添へられてあつてこれを讀んで分らない所があつたら質疑して下さいなんぞと言つて來ました。しかし、神様のことなんぞはもう少しお預けに願ひたいものです。……

まあ、さう言つておかないと、ちよつと氣まりの悪い事がある——といふのは、僕は實はゆるべから信心深いポオル・クロオデルの「マリヤへのお告げ」といふ戯曲を讀んでゐるところです。だが、それは何もこの中にあるカトリック的主題に心惹かれて讀み出してゐるわけではなく、實をいふと例の小さな仕事のために、自分のまはりに一種の宗教的雰圍氣みたいなものを人工的に製造しようとしてゐるだけなのですよ。

一體、このクロオデルの「マリヤへのお告げ」は、その表題が表題だけに、すぐにあの「受胎告知」の畫家たちがしたやうに、天使ガブリエルが村のマリヤの許を訪れるルカ傳の一節か

なんぞを戯曲化したものとお考へなさるでせうが、さうではありません。クロオデルはこの戯曲の中に唯、聖女になればなるほどいよいよ人間的になつていつたヴィオレエヌといふブルタアニエの或村の若い娘の姿を描いてゐるだけなのです。それではそんな表題は何を示してゐるか云ふと、まあ、人間的なものの中への神的なものとの闖入といつたやうなものがこの戯曲の主題になつてゐるからだらうと思へます。——いま、僕の書かうとしてゐる小さな仕事を、こんなところへ持ち出すのはすこし烏滸がましいやうだけれど、まあ、僕の奴もさういつた氣もちで、つまりあれらの愛すべき受胎告知圖の氣もちだけを汲むやうにして、一切マリヤもガブリエルも出さずに、ただその二つのもの——人間的なものとの神的なものとの——の美しい挨拶をいま僕の住んでゐるやうな高原の淋しい村での春先きの頃の小さな出來事として、一つの牧歌に歌ひ上げたいまです。ひよつとしたら、そんな出來上つた作品なんかより、かうして雪に埋れた谷間の一軒家でもつて、寒さにかじかんだ手に自分の息をふきかけながら、こんな手紙を貴方に書いてゐる僕の方がよつぽどロマネスクかも知れませんね。

十二月三十一日、輕井澤にて

しばらくお便りを差し上げませんでしたね。仕事をしてゐたものですからお許し下さい。それにクリスマス頃上京するなんていつてゐて、——とうとうこちらで野村君と二人きりで淋しいクリスマスを送つてしまひました。野村君はそれから二三日して東京に歸りました。僕だけ残つて仕事を續けてゐましたが、漸つとそれも片がつき、きのふ送つてしまひました。これからその原稿料が届くまで、雪の中に一人で頑張つてゐなければなりません。仕事の方は、自分でも本當に思ひがけなかつたものを書いてしまひました。「風立ちぬ」のエピログをなすものです。或日、友人の送つてくれたリルケの「鎮魂曲」を何氣なしに讀んでゐる中に急にそれが書きたくなつて殆ど一氣に書いてしまつたのです。

これで「風立ちぬ」も二年ごしに漸つと完成したわけですが、こんどのは去年の冬、あの一聯の作品を書いてゐた當時、その最後には是非付けたいと思つてゐた、自分と共に生を試みんと

してその半ばに倒れた所の愛する死者に手向ける一篇のレクキエムです。——實は去年の冬ぢう、この一篇をこそ書きたいばかりに追分なんぞにたつた一人で暮らしてゐた位でしたが、とうとうそれが書けず、もうさういふ死者に對するレクキエムのごときものは自分には書けないのではないかと半ば諦めかけてゐたのでした。それがこんどの火事のおかげで、いまのやうな山小屋住ひを餘儀なくされてゐるうちに、急にそれが書けさうな氣がしてきて、いささか持て餘し氣味だつた例の牧歌の方はその儘にして、そつちを一氣に書いてしまつたやうなわけ。「雉子日記」などを残したきりで、去年の冬ぢう、雪の林のなかなどにそんなレクキエムを求めながら一人でさまよつてゐた頃の、いま思ふと自分の痛々しいやうな姿が、この冬のこんな山暮らしをしてゐる自分の裡にそつくりそのまま蘇つてきて、其處においてはじめてその形體を得た、とまあ言へないこともないでせう。——本當にいろんなものを私は火事で失つたけれど、その代りに思ひがけずそのお蔭でこの一篇のレクキエムを得られたので、もう失つた何もかもさへ惜しくはない位、——來年の春にでもなつたら、「風立ちぬ」を一まとめにして氣に入つた本にして置きたいものだ、いまからもう楽しみにしてゐます。

今、一仕事をしたあとの、やや空虚にさへ似た落ち着いた気もちで、僕は暖爐に足をかけながら、「リルケの思ひ出」といふ本を讀んでゐるところ。この筆者のトゥルン・ウント・タクジス公爵夫人といふのは晩年のリルケにかなり深い交渉のあつた女性で、詩人が殆ど十年もかかつて「ドワイノ悲歌」を完成するまでの異常な勞苦をつぶさに僕達に語つてくれてゐますが、そんなものをかうやつて讀みふけてゐると、何か自分にも努力次第でいまに好いものが書けさうな氣さへしてきて、新しい、靜かな力のやうなものが私の裡に充ち満ちてくるのを感じずにはゐられません。

それにしても、こんな雪に埋つた山の中に、自分みたいなのがよくもまあかうやつて一人つきりで平氣で居られるやうになつたものだなあ、とつくづく自分に感心もしてゐます。僕もどうやらこれで漸く一つの人生學校を卒業したのでせうかね。

山の家にて

卜居

津村信夫に

この家のすぐ裏がやや深い谿谷になつてゐて——この頃など夜の明け切らないうちから其處で雉子がけたたましく啼き立てるので、いつも私達はまだ眠いのに目を覺ましてしまふ程だが——、それでも私はその谿谷が悪くなく、よく小さな焚木を拾ひがてらすんすん下の方まで降りていつたりする。その谿谷の丁度向う側にある、緑色の屋根をした大きなヴィラが、いまはまだ木の枝を透いて手にとるやうに見える位。その谷間の雑木林はやつと芽を出したばかりだが、今日なんぞ、そこで焚木を拾つてゐたら、ぶんとおととらしいものがいきなり飛んできて、私の顔のまはりにいつまでもつきまとつてゐた。少しうるさかつたが、なんだかちよつとそれに夏の氣分を感じて、懐しくもあつた。——それほどもう夏の或るものがついそこまで來かけてゐるといふのに、それを除いたすべてのものにはまだ春さへ充分には行き渡つてゐない。夜な

んぞはこれで想像以上に寒い。いまだつても、この手紙を書きながら、ファイア・ブレスに火を焚いてゐるほどだ。しかしそれは私が晝間谷から自分で採つてきた僅かな焚木でも事足りる、わざわざ薪を買ふほどのこともない……と、まあ、さういつた位の餘寒さだ。

さう、まだ君にはこの新居のことを話さなかつたね。御想像どほりの、相變らずの不便な山の中で、それに慣れつこの自分とはともかくも、はじめての女房には、いささか可哀さうな位だし、それに家がすこし二人だけで住むには大き過ぎたけれども、小屋のつくりが（こんなのを瑞西などで Chalet といふのだらうか）いかにも氣に入つたので、思ひ切つて借りた。——本當をいふと、こんな一番山奥の、それにこんな二人きりには少し大き過ぎて持てあまし氣味の小屋を、他にいくつもあつた手頃な小屋よりも私に特に選ばせたのは、實はこのファイア・ブレスの傍に二つ三つ無雑作にころがつてゐた古い樫の木椅子（昔から私はこんな椅子をどんなに欲しがつてゐただらう！）と、それからレムブランドの繪なんぞの入つた額縁がいくつか裏を向けて埃まみれのまま壁に立てかけてあつた小さな屋根裏部屋となのだ。いくら女房持ちになつたつて、こんな風な一向變らない私を知つて、さぞ君は嬉しがつてくれることだら

うな？ それとも少しは私達の行末が氣になるとでも云ふかね？

私はその屋根裏部屋をすぐ自分の部屋にきめて、そこに自分の椅子のすべてと、それから去年火事ですつかり焼いてしまつてから又ぼつぼつと集め出した少數の本の中から、特にリルケのだけを持ち込んだ。これは女房の奴には内證だが、私はこの屋根裏部屋にときどき閉ぢ籠つては、全く一人つきりで、昔の自分にそつくりそのままの自分に返つて、心ゆくまで自分の青春に訣別を告げようといふ陰謀。——が、その代り、階下の、女房と共同の部屋には、女房に買つて貰つたトルストイ全集だの、ジャック・シャルドンヌの「祝婚歌」や「クレエル」などを積み重ねて、一方、大いに結婚生活者の心理研究もしようといふ感心な心がけさ。……當分、そんな二種類の自分が、私の裡でお互に勝手悪さうに同居してゐるだらうが、それはまあ仕方があるまい。慾を云へば、かへつていつまでもかうしたままの通りであつてくれた方が自分には何んだか面白さうだ。

こんな手紙を君に書きながら、私がいま思ひ出してゐるのは、二三日前にも讀み返したリルケが「マルテの手記」の中でフランス・ジャムらしい詩人のことを書いてゐる一節だ。——

「ああそれは何んといふ幸福な運命であらう。先祖代々の家の、物静かな部屋に坐つて、家付の落ちついた家具に取圍まれながら、まぶしいほどの新緑の庭で山雀が啼きかはしたり、又、遠くの方で村の時計の鳴るのを聞いたりしてゐるのは。さうやつて坐つて、午後の温かな日ざしを眺めながら、昔の少女たちの話を澤山知つてゐて、そしてしかも詩人であるといふのは。さうして自分だつて、もし何處かに——この世の何處か、誰ももう行つても見ないやうな閉ざれた田舎家の一つにでも、——住むことが出来て居つたならば、彼に似たやうな詩人にもなれてゐただらうと思ふのは。私にはたつた一つの部屋が（屋根裏の明るい部屋が）ありさへすれば好かつたらうに。さうしたら、私はそこで自分の古い身のまはりの物や、家族の肖像や、書物だのと一しよに暮らしただらう。それから私は椅子や、花や、犬や、石ころの多い小徑のためめな丈夫なステッキも持つたらう。そしてその他には何ももう持たなかつたらう。……が、すべてはそれとこんなにも異つてしまつてゐるのだ。その訣は神様だけが知つてゐられる。私の古い家具類は、私が預かつて置いて貰つてある或納屋の中で朽ちつつあるのだ。そして私自身はと云へば、ああ私にはこのやうに屋根さへなく、雨は私の眼のなかにも降るのだ。」

まあ、この世のこんなところに、——かうして自分の氣に入つた屋根裏部屋をしぼらくなり借りられて、椅子や花や犬などと氣持よささうに暮らしてゐる、恐ろしく出来損ひのマルテといつた恰好の自分、——それにしたつて、その氣持のいい何もかもがいつまでも自分のものであるわけのものではなく、そんなフランス・ジャムのやうな詩人になり切れさうな日も、また何んと遠いことだ……

が、いまだけはともかくもかうした幸福さうな私達、——この私達には、現在、花だつて、犬だつて、少しも事は缺かない。——例へば、ついこの間、私がすぐ裏の樅の木かげにちよつと目につかないくらゐに小さな青い花が一面に咲いてゐるのを見つけて、何んの花だか知らなけれどいかにも可憐だつたので、その見本のやうに一輪だけ摘んで得意さうに持ち歸つてきたら、女房の奴に「あなたが董の花なんぞを摘んできて。それにうちの庭にだつてたくさん咲いてゐるぢやあないの？」と笑はれた。なるほどさう言はれて見ると、わが家の庭の隅々にもそれと同じ可憐な花が一ぱい咲いてゐるのに漸つと氣がついた。それにしても董の花をいままでも少しも知らずにゐた私の迂濶さ！……だがそんな迂濶なところのある私だけに、いま、——

こんな人生のこんな瞬間に、——堇の花みたいなものまでもかうやつてしみじみと見て楽しんでゐられるのだから、と誰に向つてもなく負け惜しむ。

夕方、女房が食事の支度をし出す頃になると、何處から來るのか、エアデルテリヤの雑種らしい大きな犬が姿をあらはす。人戀しげな女房がそんな犬まで歡待して、家の中へ入れてやるものだから、私達が食事の間、私達の傍に仲間の一人といった恰好で坐つてゐる。しかし、私達が分けてやるものがもう何もなさうなのを見ますと、私達のこはごはしてやらうとする愛撫には目もくれないで、さつさと外へ飛び出してしまふ現金な奴。もうすこし一しよに居て、かうやつてファイア・ブレエスの前で私がまだいくぶん獨身者のやうに、ときどき一人ごとなど言ひながら手紙を書き、女房が心もち物足りなさうな顔をして、編み物をしてゐる傍で、ちよつとの間だけでも、こんな少し淋しすぎる一家團樂圖を賑はせてゐてくれたら好かりさうなものなのに。

一九三八年五月十七日、輕井澤にて

夢の花

六月二十日

これでもう山小屋に雨に降りこめられてゐること一週間。——「雨の輕井澤もまたいいです」などと友達に手紙を書いてゐた女房も、きのふあたりから少し氣が變になつてゐはしないかと思ふ位。

——何しろ、縦の木なんぞの多い山のなかの一軒家だから、雨の音が騒がしいほど大きく、それがまた絶えずさまざまな物音に變化して聞える。

子供の頃聞き慣れた支那語の唄がとぎれとぎれになつて聞えてくるなどと女房が不意に言ひ出したりするので、けふなんぞは、私までも一日中なんだか家の外ばかり氣にして見てゐて、仕事に手がつかない位。

かうして二人つきりでゐると、相手の神經衰弱などすぐうつると見える。——いまも、黄色

の小さなゴム毬のやうなものが草の中をびよんびよん跳ねてゐるのに、をかしい程びつくりして見たら、それはこんな林の奥まで水溜りを傳つてきたらしい一羽の黄鶺鴒。……

六月二十四日

やつと雨があがつた。ひさしぶりに二人で散歩に出る。途中で、鶴屋の主人に逢つて立話。

——「今年はどうも葉ばかり多くて、花が少い」と氣の毒がるやうに云ふ。それでも少しは花もあらうかと村を一巡して見た。

なるほど、今年は無残。唯、グリーン・ゲエブルスといふ、緑の切妻のある、イギリスの老婦人の住んでゐる小さな家の裏に咲いてゐた蔓の花と、チェッコ公使の別荘の廣々とした芝生だけが鮮やか。……

それからまだ躑躅の花の乏しく咲き残つた原へ出たら急に霧がまいてきて、目の前を何羽か啼いてよぎつた尾長の姿さへ見えなかつた位。やつと其處を突きぬけて、ふと振り返ると、ま

だ、その原は霧の中。

合同教會の裏の、或外人の別荘の前に、野薔薇の木がめづらしく五六輪の花をつけてゐたので、何氣なく近よつて見ると、その茂みの中に一羽の小鳥が不安さうにあちこちと枝移りしてゐる。をかしいと思つたら、小さな鳥の巢があつた。

秦皮トネリコのステッキで其枝を掻きよせて巢の中を覗いたら、まだ羽も生えてない、目ばかり大きな、茶色の雛が四五羽、無氣味にうじようじよしてゐた。親鳥はもう逃げた跡。

一九三八年

巢立ち

—或牧歌—

彼女は窓をあけた、さうすると、まるでさういふ彼女を待つてゐたかのやうに、小屋のすぐ傍らの大きな樅の木から、アカハラが一羽、うれしさうに啼きながら飛び下りてきて、その窓の下で餌をあさり出した。けさもまた霧雨がふつてゐるのである。もう七月だといふのに、さうやつて窓をあけてゐると、寒いくらゐだ……

はじめのうちはよく彼女は、その小鳥に何かやらうと思つて、いそいで食物の残りをもつてきてやつたが、それを投げると、小鳥はびつくりして逃げてしまつて、二度と近づかないのである。それでこの頃はもう、彼女は窓のところの手をかけたきり、草の中に赤い胸をかくすやうにして、何をあさつてゐるのか、小鳥があちこち走りまはつてゐるままにさせて置くのである……

突然、その小鳥が何かにびつくりしたやうに、飛び去つた。氣がついてみると、彼女の背後

に、いつのまにか彼が寝間着のまま突立つてゐるのだつた。

「なあんだ、おれが來ると、すぐいつてしまやあがる」彼はさう不平さうに言ひながら、軽い咳を二つ三つした。

「あなたは亂暴だから……」彼女はいそいで窓を閉めながら、しかしいたはるやうに彼に言ふのだつた。

かうしてすこし病身な彼を相手の、さうして彼の好きな森のなかでの——しかし彼女にとつては最初は淋しくないこともなかつた孤獨な生活にも、だいぶ馴れてきたこの頃である。さうしてその毎朝々々は、いつも大抵このやうにして始まるのである……

**

この山奥の村——去年彼と彼女とが其處ではじめて知り合つた——に二人が結婚して、一しよに暮らしにきたのは、もう一月ばかり前になる、六月のはじめだつた。丁度、アカシヤが花ざかりだつた。それから道ばたの藪は野茨の白い小さな花を簇がらせてゐた。數日、彼等はま

だ誰あれも来てゐないその村ぢうを、二人で住むのにいイヤうな小さい家を探して歩いた。ちよつと好ささうなコツテエヂは、その持主を尋ねて見ると、みんな他人の別荘だつたりした。しまひにはがつかりして、もうその持主を訊かうともしないで、二人は住み心地のよささうなコツテエヂがあると、その前にいつまでも立ち止まつたまま、そこに自分たちが住まへたらどんなに楽しげに、幸福さうに見えるだらうと、そんな彼等自身の日常的な姿を空想したりしてゐた。自分たちのものにはなりさうもない幸福そのものやうな、他人のコツテエヂを前にしての、そんな空想はしかし二人を愉しませた。さうやつて毎日捜してゐてもなかなか氣に入つた家の見つからないことが、そんな道草を食ふ愉しみのために、それほど苦にもならなかつた位。……

數日後、彼と彼女とがそんな家捜しからまたしても空しく歸る途すがら、集會堂オキヂトリヤムの裏に抜ける林道をまはつてくると、いままで兩側から灌木に挟まれながらSの字を描いてゐたその細い道が一軒のコツテエヂの前にひらけ、丁度その前でぐつとLのやうに曲つて、其處から橡の林の中にはひり込んでゐる。——その灌木の中から抜け出した瞬間、人々はいきなり目に入れる

のだつた、先づ一めに眞白な野茨の花の咲いてゐる生籬いけがきを、それからそれに半ば埋まつてゐる一つの小さなコツテエヂを。それだけ、そのコツテエヂと、その生籬の効果は甚だ顯著だつた。勿論、そのコツテエヂはまだ人が住まず、閉されてゐた。

「おい、すこうしあのヴェランダで憩んで行かうぢやあないか？」彼は快活さうに彼女をふりむいた。

「構はないかしら？」

「うん。いいだらう。それに、誰れも見てゐやあしないもの。」彼はそのコツテエヂに毎年來てゐる若い外人夫婦とは顔馴染だつた。特にその北歐系らしい美しい細君の顔はいつでもはつきりと蘇らせられた。それだけに彼等の幸福の領分を荒らすやうでちよつと氣のひけたこともひけたが、そのまま其處を過ぎ去つてしまふにはあんまりすべてがその瞬間の自分達に似つかはしく、愉しさうだつた。そこでそんな顔馴染の住人達のことには彼女には噫おんにも出さないで、彼はすんすんその家のなかにはひつていつて、すました顔をしてヴェランダに腰を下ろした。彼女はそのコツテエヂのまはりを仔細に、と云ふよりかやや不安さうに見まはしてから、彼の

そばに来て、並んで腰を下ろした。そのヴェランダにさうやつてゐると、なるほど、まはりの生籬に隠れて、道の方からは殆ど彼等は見えさうもなかつた。さうしてその無数の野茨の花のほひは、まるでその生籬自身が呼吸でもしてゐるやうに、彼等のまはりまでときどき匂つてきたり、又あるかないかになつて消えていつたりしてゐた。

「あら……」と彼女は、丁度彼等のまん前の、生籬の茂みの中をさつきから啼き聲も立てずにしきりに不安さうに枝移りしてゐる一羽の小鳥にそのときはじめて氣がついて、肩を並べてゐる彼に指さした。「あの小鳥は何をしてゐるのでせうね。なんだかあの野茨の中から出られなくなつちやつて、まごまごしてゐる見たいね。」

「本當だ」と彼もやつとその小鳥に氣がつき出した。葉がくれで、その上氣が狂つたやうに飛び移つてゐるので、さうよくその姿が見えず、その小鳥がどの位の大きさだかすらもちつとも見當がつかなかつたが、胸のところだけちらつと煉瓦のやうに薄赤いだけが認められた。

そのうち、さうやつて二人して見てゐる前で、その小鳥はどうしたのか、その茂みから抜け出したやうな氣配もなく、突然姿を消してしまつたのだ。……

「あら、あんなところに鳥の巢が……」彼女はさう言ひかけたまま、少女らしく弾む心をおさへるやうにして、そつと腰を浮かせた。

「何處に？」彼は無精さうに腰を下ろしたまま、訊いた。こんなところに鳥の巢なんぞあつてたまるもんかと云つたやうな口吻である。

「ほら、あそこによ……あれが見えないの？……」いつのまにか立ち上つた彼女が、それを彼に教へるやうに、その生籬の方へ近づいて行かうとすると、何處かへ見えなくなつてゐたさつきの小鳥らしいものが、ついとまた姿を現はし、こんどは巧みにその生籬をくぐり抜けて、さつと飛び立つた。その飛び出したあとへ目をやると、なるほど鳥の巢ほどの暗い塊がある。

彼もそれを見ると、急に元氣よく立ち上がつていつたが、そこいらの茂みは相當深いので、鳥の巢が目とすれすれの高さ位にあるのに、さうしてその巢の中で雛鳥らしいものがびよびよ啼いてゐるのさへ彼等に聞えてくるのに、それがどうしても覗けないのである。何んとかして早くそれが見たいので、こんどは二人で林道まで出ていつて、反對の側からそれを捜してみる、と、それがつい鼻のさきに懸つてゐるのに、こんどは道がそこところだけ凹んでゐて、いく

ら背伸びをしてもやつぱり目が届かない。何しろ野茨だから、棘が一ばいあるので、枝をたぐりよせることが容易に出来ないのである。そのとき彼はふいと手にしてゐた秦皮のステッキに気がついて、それを持ち變へて、その握りのところにその鳥の巢の懸つてゐる白い花の一ばい咲いた枝ごとそつと引き寄せて、爪先き立つたら、やつとその巢の中がのぞけた。巢の中には、目ばかりぎよろつかせた、まだ羽の生えてゐない、へんに不恰好な雛たちが、四五羽塊りあつて、うごめいてゐた。さう、生れてからやつと四五日した位のものに見えた。——さつき親鳥らしいものがそのとき急に彼の頭上の高い木の梢でたましく啼き出した。それに應ずるやうに、巢のなかでも雛たちが一層びよびよ啼き出したやうだつた。彼はなんだか自分が残酷なことをしてゐるやうな気がして、もう覗くのを止めてステッキを弛めようとする、彼女がそれに代つて見たさうにしてゐるので、鳥の巢のある枝をひつかけたままそのステッキを彼女に手渡して、自分はそつと其處を立退いた。

「まあ何んて氣味が悪いの……どんなに可愛いのかと思つたら……」彼女も彼のしてゐたやうな恰好をして、爪先き立つて、その巢の中をのぞき込みながら、驚いたやうにさう言つた。

その間、彼は彼等の頭上を枝移りしながら、氣づかはしげに啼きつづけてゐる親鳥の姿を捕まへようとしきりに目で追つてゐたが、なかなかその正體は目には止まらなかつた。胸のあたりの煉瓦のやうな色だけがときをり、ちらつと認められたきりで……

彼等はそれからまた何といふこともなしに、再びヴェランダに戻つて、そこにさつきと同じやうに並んで腰を下ろした。

本當にこのままかうして自分達が此處に住んでゐるのだつたら！ この住み心地よささうなコツエヂと云ひ、この花ざかりの生籬と云ひ、この小鳥の巢と云ひ……しかし、まあ、何んだつてこんな人の目を誘ひがちな、眞白な花を咲かせてゐる野茨の茂みの、しかも手を届かせようと思へばわけなく手の届くやうな枝を選んで、わざわざこの小鳥は巢なんぞを作つたんだらう。莫迦だといへば莫迦だが、もしかそいつが何んにも知らないでこの藪に巢をつくつたのだとしたら、もう雛が孵りさうになつたのと殆ど一しよにその藪に一めんに眞白な、好いにほひのする、小さな花が咲き出したのに、まあどんなにそいつは面喰つたことだらうと、何んだかそのかうやつて自分達をいま愉しませてくれてゐるやうな失策をやつたその小鳥がいぢらし

いやうな氣もした。——さつきまであんなに氣の狂つたやうに啼き立ててゐたその小鳥の奴は、彼等がその巢の傍を離れると、もうけろりとしたやうに、再びその生籬に戻つてきて、花や葉のなかを何かせはしさうに、いくぶんまだ不安さうに枝移りしてゐる。

何處からか自轉車の音が近づいてきた。前方の、兩側から生ひ茂つて道の上方にトンネルをつくつてゐる灌木の中から、首をこごめるやうにしながら、自轉車に乗つた御用聞きが飛び出してきて、そのコツテエヂの前を急カアブしながら、その花ざかりの生籬にも、その花かげにゐる彼と彼女とも、それから勿論その小鳥の巢にも、氣がつかないやうに通り過ぎていつた。「こんなところに巢があるなんて、却つて誰も氣がつかないのかも知れないわね……」彼女はそれを見て、すこし安堵したやうにさう言つた。

「……」彼はどうか分るもんかと云つたやうな顔を、意地わるさうにわざととして見せるのである。

それから暫くしてから、こんどは反對の、集會堂オヂトリヤムの方から、——年とつた外人夫婦が腕を組み合つて、しかしお互に上體を眞直にしたまま、とつと歩きながらそのコツテエヂの前を通り過ぎて灌木の中に消えていつた。何か快活さうに口笛をふいてゐた御亭主の方だけ、通りすがりにちらりと花の生籬の方へ目を注いでいつたが、一向私達にも、その小鳥の巢にも氣づいた風はなかつた。……

突然、彼は夢から醒めでもしたやうに立ち上つた。さうして「さあ、もう歸らう」と言つた。彼女も素直に立ち上りながら、しかしまだ夢に半ば浸つてゐるやうな聲で「このままそつと置いて、毎日見に來ませうね……私達のほかに誰もきつと氣がついてゐないから……」と啼いた。

「どうだか分るもんか……」彼はそんな場合のいつもの癖で、少しぶつきら棒に言つて、それでも道に出てから、もう一度その鳥の巢を通行人の目につき易いかどうか調べて見るかのやうに見透かすやうにしてゐたが、もうさうしてゐても切りがないといつたやうに、ステッキを振りながらさつさと歩き出した。

その翌日、やつと借してもらへるといふ、まあどうやら彼の氣に入つたコツテエヂが見つかつた。だいぶ山の上なので、すこし不便で、淋し過ぎると彼女は思つたが、數本の大きな樅の木を背負つた、何處から何處まで木の皮葺きの、いかにも山小屋然とした造りが大へん彼の氣に入つたらしいので、また自分の方の都合は讓歩して、そのコツテエヂを借りることに同意した。それから早速、荷物をほどいたり何かして、相手の彼が病身なので、何もかも大抵彼女が一人でやらなければならず、さうなるともうきのふの小鳥の巢どころではなかつた。夕方、やつと片づいた頃から、あいにく夕立氣味の雨になり出した。

明くる日も、そのまた明くる日も、どしや降りだつた。せつかく二人きりの愉しかるべき生活をはじめようとしてゐる矢先に、これでは、まだその住みつかないのでどこか空家みたいな感じのする小屋コツテエヂの中をあつちへ行つたりこつちへ來たりしながら、佗びしく閉ぢ籠つてゐるよりしやうがなかつた。ときどきひよつくり小鳥の巢のことを思ひ出して、この雨にどうなつた

らうと二人で氣遣はしさうに話しあひはしたものの、病身の彼には、この雨を冒してまでそれを見にゆくほどの氣にはなれなかつた。——をかしなことには、この小屋の傍らの大きな樅の木には、始終、いろんな小鳥がやつてくるのに、そんなものは彼には眼中にないらしく、まるであの野茨のなかに巢喰つた見知らない小鳥の他は小鳥なんぞのゐることを忘れてしまつたやうに、やあカケスが來やあがつたな、いつも Jay, Jay と云つてやがつて煩さい野郎だ、——あの莫迦な啄木鳥ツツキの奴め、ああやつて樅のてつべんまで攀ぢ登つてゆく氣なのかしら、といった冷淡な調子で、彼はそれらの小鳥をちらりと見やるぎりだつた。

やつと雨が晴れ間を見せ出したので、足りない世帯道具や食糧品を求めがてら、二人で蝙蝠傘を用心にもつて小屋を下りていつた。

村で買物をすませてから、彼等は靴屋によつて、途中でぶつりと切れた彼の靴の紐をとりかへて貰つた。

その古ぼけた靴屋の店の奥には、鳥籠が一つぶらさがつてゐた。何んといふ小鳥だか知らないが、胸に黄いろいチョッキを着込んだ奴が、きよとんとして彼等を見下ろしてゐた。いつも

鼻のさきに老眼鏡をかけてゐる靴屋の主人が出てきたとき、彼は急にこの男がこの村切つての小鳥通だといふ話を思ひ出した。その主人が彼の靴の紐をつけかへてくれてゐる間、彼はそんな事をきくのを羞かしさうに、

「こなひだあの集會堂オオトリアムの裏のところで、小鳥の巢を見つけたんだけれどね。花のさいた野茨の茂みの中で、もう五六羽雛に孵かつてゐたんだがね、——あんなところに巢をこしらへるのは何かしら？」

「どんな鳥でしたな？」靴屋は何を言ふかといつた顔をして、眼鏡でしにぢろりと彼の方を見た。

「胸にちよつと赤みのあるね、羽はさあ？……」彼はすこし上づつたやうに彼女の方へふりかへつた。「おい、ありあぢ色だつたかなあ？」

彼女も説明に困つて、ただ氣まり悪さうに首をかしげてゐるきりだつた。

「アカハラかなんかでせう」靴屋はあんまり興味もなささうに答へた。

「アカハラなら僕も知つてゐるけれど、どうもアカハラぢやなかつたなあ」

「そんなところに巢をつくるのはアカハラ位なものですよ」と靴屋は彼を軽く一蹴した。自分の小鳥の觀察の仕方の出たらめだつたのに、われながら呆れ返つてゐた矢先だつたので、それに文句の言ひやうもなかつた。彼はもう靴屋の説に抗はないことにした。

靴屋を出しなに、ふとそこにぶらさがつてゐる鳥籠に氣がついて、彼は、

「その小鳥は何ですか？」と訊いた。

「これはキビタキです」靴屋はその鳥籠へ目をやると、もう彼等の方をふりむきもしないで、いかにも優しい目つきになつてその小鳥を眺め出した。まあ、何んて變つた、しかし小氣味のいいおやぢなんだらう、と彼は思ひながら、彼女を先に立てて、その靴屋を出た。

それからどちらから言ひ出すともなしに郵便局の角を曲つて、朴ハシの花のさいた集會堂の前を横切りながら、例の小鳥の巢のあるコツテエヂの方へ、彼と彼女はこんな會話をしいしい向つていつた。

「あの靴屋は何あに？ すねぶん無愛想な奴ね。」

「うん。……だが、ああなると、もうあれはあれなりに風格があつてなかなか好いぢやない

か。小鳥のことなんぞ、おれ達みたいな奴に何が分るもんかつて、云つた顔をしてゐる。それはさうだとも。又、あのおれのおれの説明の仕方つたら、なつちやゐなかつたからなあ……」

「まあ、あなたつたら、あんなに言はれても憤慨なさらないの？……随分人が好いわね……」

彼女にはさういふ人の好い彼がいかに焦れつたさうに見える。しかし實をいふと、彼が何處までも本気でさういふことを彼女に言つてゐるのか、彼女を揶揄つてゐるのぢやないのか、よく分らないので、その方が本當は心細いのである。

彼は彼で、彼女がさういふ考への中に沈み出したのをいい事にして、あれはやつぱりアカハラだつたらうかと心のうちでとつおいつしながら、片手に二人分の巴旦杏はたんきぎをかかへ、片手にいつものステッキの代りに蝙蝠傘を突きながら、とつととそのコッテエヂの方へ歩いてゐた。やつと向うにその生籬が見え出したのである。

もう雨のためにあらかた花の散つてしまつてゐるその野茨の茂みの中に、しかし、例の小鳥の巢はそのままそっくりしてゐた。あれから五六日経つてゐるのだし、あんなにひどい雨だつたので、どうなつてゐるだらうと思つて、その鳥の巢の懸つてゐる枝ごとこんどは蝙蝠傘の手

でたぐりよせて見ると、先づ、聞き覚えのある雛たちの啼き聲がきこえ、それからもうすつかり羽の生え揃つた、嘴ばかり大きい、胸の煉瓦のやうに赤らんだ雛たちが、五六羽まだその巢のなかにどれがどれやら見分けのつかないやうに一塊りになつてゐるのが認められた。けふは親鳥は何處へいつてゐるのやら、近くに影も形も見えなかつた。

こなひだは、あんなに見事に咲いてゐた野茨の花は、その元氣のいい雛たちとは打つて變つて、雨に打たれてすつかり萎れ切つて、もう残りの匂さへさせてゐなかつた。この前並んで腰かけてゐたヴェランダも雨ですつかり汚れてゐた。それでも彼等はそれに近づいていつて、何とはなしにそのヴェランダに立つて見た。そのとき不意と、この前彼等の目のまへの茂みの中をあつちこつち枝移りしてゐた小鳥の影がちらつと彼の記憶から蘇つた。……

「やつぱりアカハラかも知れないや……」彼はやつと納得した。

アカハラなら、この村にはたくさん棲んでゐて、一向珍しくもない小鳥だ。むしろ、秋などになると、二三羽——十二三羽と群をなして、よく人家近くなどに餌をあさりに來てゐる、慣れ慣れしいくらゐの小鳥。きよとんとした顔をして、その小鳥に近づくと人間なんぞを見上げる

目つきがどうも彼はあんまり好きぢやなかつたのである。その花のさいた茂みの中に巢をつくつた小鳥がもつと珍しい種類のものであることを欲した氣もちが、その鳥の巢を知らず識らず彼に見誤らせてゐたものと見える。

「アカハラの巢ぢやあ、いくら見つけられたつて、誰も持つて行きやしないや」と彼は自ら嘲けるやうに言つた。

アカハラだつて好いわと彼女は、自分の見つけた鳥の巢の中から漸く巢立つて行かうとしてゐるその小鳥たちを何としても可愛がつてやりたかつた。それにアカハラといふ小鳥の名が、彼女に Red-Breast といふ英吉利の俗語などによく唄はれてゐる可愛らしい小鳥を何となく聯想させて好ましかつた。あれは確かロビンの一種だが、これだつてことによるとその英吉利の有名な小鳥の一種かも知れない。そんなことは彼だつて、あの高慢な靴屋だつて、知らないから、ただこの村にさらにゐるといふだけで、莫迦にしてゐるにちがひない。よし、自分は自分なりにこの小鳥たちを可愛がつてやるからいい……そんな事を夢中に考へ考へ、彼女は彼の速くなつたり弛くなつたりする氣まぐれな歩調に合はせにくさうに、歩いてゐた。

**

しかし、さういふ彼女にとつて不幸なことには、急に彼の父が病氣になつて二人とも彼の故郷によびよせられたのである。それがどうやら小康を得たので、再びその村に戻つてきたのはもう六月も末になつてからだつた。そしてその小鳥の巢のことなんぞは——少くとも彼はもう忘れるともなく忘れてゐた。

**

今年はよくよく雨の多い年だと見える。その村を彼等がしばらく留守にしてゐた間も、かなり雨がふりつづいてゐたと見え、彼等のコツテエヂから村へ下りる山道などはよほど注意しないと歩けないくらゐ凸凹がひどくなつてゐて、林の中などは木の枝がいくつとなく折れ、青い葉が生ま生まして一めに散つてゐるのである。——雨上りの或朝、彼等が散歩のためにさういふ惨とした山道を村へ下りて行かうとすると、彼等の行手に一羽の小鳥が、足でも傷ついた

のか、人間の近づいてくるのに一層あわてて、しかし飛び立てずに、びよこんびよこんと跳んでゐるのだつた。アカハラだと思つて、彼がいつになく元氣になつて追つてゆくと、彼自身**が**びつくりしたほど、難なくそいつが捕まつてしまつた。見ると、それは何んと巢立つたばかりらしいアカハラの雛鳥だつた！ さういへば、さつきから彼等の頭上を遠のいたり近づいたりしながら、梢でけたたましく啼いてゐる鳥がゐたが、それがその親鳥で、さうやつて自分の手もとを勝手に離れていつた雛鳥を氣づかつてゐたのである。

彼は両手の中に、不思議な、何とも云ひやうのない、火のやうな熱さを感じながら、その仔鳥をおさへてゐた。さうして彼女に近づいていつて、その手を細目にあけながら、それを見せつけてやつた。小さなアカハラは、この前巢の中で見たのとそつくりな鋭い嘴を大きくあけて、あつたけの聲を出して泣きわめいてゐた。

「捕つていつてしまはうか？」彼はひさしぶりで生き生きと顔を赫やかせながら、彼女の方を見た。

「さうね……」彼女はちらつと彼の手の中のアカハラを見たとき、こりあひよつとするとあの彼等の見つけた巢から巢立つた一羽かも知れないと思つた。若しかあれだつたら——「……でも、なんだか可哀さうね……」と言ひながら、あんまり泣きわめいたので、もう聲が出ないのに、まだ嘴を大きくあけたまま、はあはあ云つてゐる小鳥を、痛ましさうに見つめてゐた。

彼はちよつとその小鳥は足でも折つてゐるのぢやないかと思つて調べて見たが、そんなことは彼にはよく分らなかつた。そのときひよいと彼は小鳥好きな靴屋の事を思ひ出した。さう、あのおやぢの云ふとほり、おれなんぞは小鳥を飼ふやうな柄ぢやなさうだと急にそれと同時に氣がついて、彼はその小鳥をすぐ放してやらうと、彼女にはただ目だけ合圖をした。さうして親鳥の手に返してやらうと思つてそれを捜したが、その鋭い啼聲は彼の頭上にあちらこちら移りながら聞えてゐても、その姿は木の葉がくれになつて見出されなかつた。そこで彼はやむを得ず、或閉された別荘の裏の方へまはつていつて、草むらの中へそつと放してやつた。小鳥はちよつと羽搏きをして飛ばうとしかけたが、すぐ草の上落ちてしまつた。さうしてもう飛ぶのはあきらめたやうに、親鳥の啼いてゐる方をたよりによろめくやうに走りながら、草むらの中に消えて行つた。……

どこからか親鳥の聲がずつと近づいてきたらしいので、両方の姿は見えなかつたが、彼等はまあ好かつたといふやうな顔をし合つて、そこを立ち去り、村の方へ向ひ出した。

みちみち、彼はふと思ひ出した靴屋の小鳥好きな話を彼女にして聞かせた。数年前、その靴屋は鳥籠の中に一羽のかはいらしいヒガラを飼つてゐた。そのヒガラは、どうしたのか片脚に隣寸の棒を結はへつけられてゐた。人がそれはどういふわけかと訊くと、その小鳥は雛のとき片脚を折つてしまつたのだつた。それで、靴屋はその小鳥にそんな義足をつけてやつてゐたのだつた……

「まあ、あんなおやぢの癖にすゑぶん可愛らしいことをしてやるのね。」彼女は稍々その靴屋に好意をもち出しながら、その話を聞いてゐた。

「そりあ、小鳥が好きならその位の事は思ひつくさ……」それから彼はいままでもそんな事を一度もしたことがないのに、急に彼女の手をとつて、それを自分の両手でおさへた。「ほら、いつも冷たい僕の手がけふはこんなに温かいよ。どうしてだか分る？」

「……」彼女は黙つてうなづいた。さうして自分の手をいつまでも彼の手の中に任せながら、

そのいつにない温か味の中に、さつきの小鳥が残していつた生命の燃焼のほとぼりらしいものを、何とも云へずうれしく感じてゐた。

この頃、彼等のコッテエヂに毎朝のやうにやつてくる一羽のアカハラがある。彼等にはそれがどうしても彼の逃がしてやつたアカハラのやうな氣がして可愛がつてやつてゐる。名前も、普通のアカハラといふのは止して、英語でレッド・ブレストと愛稱してやつてゐる。

しかし、なかなか野蠻な奴だ。或朝なんぞ、彼女が窓からそのレッド・ブレストの餌をあさつてゐるのを見ると、何か細長いものを嘴に啣へて、それをしきりに一息に嚙み込まうとしてゐた。この頃よく庭に落ちてゐる栗の花かなんぞだらうと思つてゐたら、それは、一びきの蚯蚓だつた。彼女が思はず兩手で目を掩つてゐると、いつのまにか彼女の背後に突立つてゐた彼が、さういふと彼女の肩に手をかけながら、そつと彼女の耳に口をよせて、

「これが人生といふものさ……」とやさしく囁くのだつた。

一九三八年七月

山日記

九月三日

ゆうべ二時頃、杉皮ばかりの天井裏で、何かごそごと物音がするので、思はず目を覺ました。ちやうど僕の頭の眞上のへん。鼠だらう位に思つて、やがてもう音がしなくなつたので、又すぐ寢てしまつた。

朝、起きぬけにけふこそ一つ仕事をしてやらうと思つて、霧の中をすこし散歩をして歸つてくると、僕を迎へる女房たちの様子がちよつとばかり變なので、どうかしたのかと訊いてもなかなか白狀しない。何か僕のいやがる事があつたらしい。

が、とうとう白狀した——けさ、僕が散歩に出た後で僕の部屋の雨戸をあけて見ると、庇から變な白いものがぶらさがつてゐる。よく見ると、二尺ばかりの蛇の抜け殻。——どうしてこんなものがこんなところにあるのだらうと不審なまま、僕が蛇の大嫌ひなのはみんな知つてゐ

るので、留守の間に片づけて置いて、僕には黙つてゐようと思つたのださうだ。

僕はそれを訊いた途端に、もうすつかり忘れてゐた、ゆうべ天井裏でごそごそやつてゐた物音を思ひ出した。どうも鼠にしてはすこし大人しすぎると思つたが、ことによるとその蛇の奴がそのとき丁度僕の頭上で脱皮したのかも知れない。

僕達のコッテエヂのまはりには、何しろ谷の上だから、少しは蛇も出るだらうと覺悟はしてゐたが、夏ぢう一ぺんも見かけなかつたので好い具合だと思つてゐたら、夜なかに屋根裏へ這ひ込んでゐようとは、本當に知らぬが佛。……

もうその蛇はとつくに出でいつたらうが、その窓枠に手をつけて背伸びをして見ると、まだ庇の穴から氣味の悪い抜け殻の切れつばしがひらひらとしてゐる。さつきいそいで引つ張つたら途中で切れてしまつた——それだけで二尺餘りもあつたのださうだから、よほど大きな奴だつたのだらう。まだ残つてゐるのは首の方の由。——

蛇の抜け殻を見るのは縁起が好いのださうだが、どうもそいつがぶらぶら下がつてゐる窓の下で、勉強をするのは閉口だから、勉強にゐるやうなものはみんな廣間に移して、しばらくそ

の一隅を假りの書齋にしつらへた。そんな事でうかうかしてゐるうちに、午前中、せつかく仕事をやらうと思つてゐた気分がめちやくちやになつてしまつた。

午後、阿比留信君來訪。霧のなかを歩いて來たので、だいぶ上衣がしとつてゐるやうだし、家の中もけさから何んとかなく濕つぽいので、煖爐に火を焚いた。早速阿比留君をつかまへて、けさの出來事を話して聞かせる。が、君はさう驚いたやうな顔をして聞いてもゐない。こんな山住ひではごく有りきたりの出來事のやうにして靜かな様子で聞いてゐる。

それから阿比留君が話を引きとつたが、なんでも君達が數年前借りてゐたコツテエデには、屋根裏に小さな蝙蝠が棲まつてゐたこともあつたさうだ。夕方、君の妹が鏡に向つて髪をいじつてゐたら、なんだかその鏡のなかを黒い影がすうすうと横切るので、ふり向いて見たら、それがその蝙蝠だつたと云ふ……

「それにしても、あの蛇はまだ天井裏にゐるのだらうかね？」

「いや、もう脱皮してしまつたんだから、そりあ出ていつてしまつてゐるよ」

「さうだらうなあ」

煖爐では、もう火がぼうぼう音を立てて燃え出してゐた。出来るだけ威勢よく燃えて、おれの裡の、蛇なんぞをびくびくするやうな、けちな根性を燃やしてしまつてくれるといい。しばらくそれから二人とも黙つて火を見まもつてゐたが、やがて私の唇を衝いて、

……Wie vor sich selbst

erschreckt, durchzuckt die Luft, wie wenn ein Sprung

durch eine Tasse geht. So reißt die Spur

der Fledermaus durchs Porzellan des Abends

(蝙蝠は自分自身を怖れるかのやうに、空中にはためき出る。

さうして茶碗に鱗ひびが入るやうな具合に、蝙蝠は掠め過ぎる、

磁器に似た夕闇を横切つて……)

といふ詩句がひとりでに浮んできた。こなひだちよつと讀んだリルケの「ドウイノ悲歌」中の一句だが、——さういへば先日芳賀檀君が來られての話に、目下そのリルケの「悲歌」の全譯に着手せられ出してゐるとの事、——かういふいまの生きることの難しいやうな秋に、あの

生への悲痛なる讃歌ともいふべき「悲歌」を、私達のために紹介してくれることほど有意義な仕事はあるまいと、思へる。その大いなる仕事をはじめられようとしてゐる芳賀君は、甚だ元氣だつた。僕は君を大いに羨んだ。……

夕方、阿比留君が歸つてから、僕は霧のために早目に薄ぐらくなり出した小屋の中に、いつまでも燃え残りの火を守りながら、ぼんやりとしてゐた。

どうもけさ片づけてしまはうと思つてゐた小さな仕事を、これからすぐにも取りかからなければならぬのだが、それが急に厭になつた。ろくな仕事をこつこつやるより、かうやつてぼんやりしながら「悲歌」のことだの、僕が近いうちに身を打ち込んでやりたいと思つてゐる仕事のことだのを考へてゐる方が、まあどんなに好い事だらう。……

いつもの事ながら、さういふ自分が本氣でぶつからうとする仕事の日々が近づいてくれば近づいてくるほど、僕はいよいよ怠惰になつて、自分でもどうしやうもない位、無爲をきはめる。さうしてもう完全に怠惰に、無爲になり切つたとき、やつと仕事に手がかりができる。それまでさうやつて何もせずにつつと待つてゐるのが、さすがの自分にも、いかにも苦しい。し

かし、いまの自分には他にはどうしやうもないのだ。

阿比留君の話では、蛇は脱皮する前に、かならず半睡状態に陥つてあらゆる動作がきはめて鈍くなるのださうだ。僕なんぞのも、ひよつとしたらその類ひかも知れない。

あんなに蛇をこはがつてばかりゐた僕の、丁度寝てゐる眞上でもつて、その蛇が夜なかに脱皮をしてゐる物音を聞きとがめながら、それとは知らずに平氣で寝てゐたなんて、どうも知らぬが佛とはいへ、僕にとつて何かの瑞兆であればよい。

一九三八年

山日記 又

124

十月九日

輕井澤はもう秋が深い。冬までおられさうなことを言つてゐた川端さんも、これからずつと木曾をまはつて鎌倉へ歸ると、さきをとつひお別れに來られたが、たぶんけふあたりはその木曾を旅してゐられることだらう。僕達はいまやりかけてゐる「續かげるふの日記」の仕上がるまでは頑張つてゐるつもりだが、さあ、いつ出來上がるのか知らん？ 實はその仕事もいよいよこれからといふところで、僕が一週間ばかり寐込んでしまつたので、二人ともすつかり惰けてゐた。が、きのふけふはもう大ぶいい。——その病氣の原因はといふと、こなひだうちの栗拾ひらしい。採れたときは、わが家のまはりだけでも、さう、毎日百個ぐらゐづつは採れたらう。しまひには僕よりも身輕な女房に、裏の大きな栗の木に登らせて、枝をゆすぶらせると、忽ち二十やそこいらは大きな音を立てて落ちてくる。僕はその木の下で、それを傍から拾

ふのである。そんな勞働が過ぎてか、或晩、僕はなんだか身體がへんに大儀なのでためしに熱を測つて見たら、三十八度近くもあつた。……それからもう朝つばらから大きな音を立てて屋根の上なんぞに落ちるのもそのままにさせつきり、女房を傍らのラッキング・チェアに坐らせて、おとなしくベッドに寐てゐた。川端さんがお別れに來られたのはそんな最中だったのでちよつと淋しかつた。歸られたすぐあと、藤屋の子供が川端さんを捜しに來たので、丁度いいところと思つて、まだどつさり残つてゐた栗をみんな川端夫人にお届けさせたりした。——しかし、もうそんな熱もすつかり下つた。

こんやあたりから又ぼつぼつと仕事をはじめようかとさへ思つてゐる。その前にちよつと夕方庭へ出てみたら、僕が閉ぢ籠つてゐた間に、いつのまにか何處もかしこも枯葉の山、——そんな中から可哀いやな、龍膽リンドウの花がちらほらと小さな顔を出してゐる。ひさしぶりに其處で夜を過ごすことにした、ファイア・プレースのある廣間なんぞは、病中散らかしたまんにして置いたもんだから、いかにも山小屋然となつてゐる。

おまけに、日が暮れると一しよに、急に風が物凄く吹きだした。ときどきそんな野分めいた

125

風がさつと屋根や窓にそこらぢうの枯葉を夕立のやうにぶつつけてゐる。そんな枯葉の或物は窓や戸の隙間なんぞを見つけては、無遠慮にコツテエヂの中まで飛び込んでくる。そして僕たちのまはりで、一塊りになつて、くるくると旋回してゐる。僕は無關心を装つて、あかあかと燃やしたファイア・プレスの前で、ほんの仕事の真似、女房もかういふ山住みには大ぶ馴れて来た見え、僕の傍で落着いた顔をして手紙を書いてゐる。さういふ僕たちを恰も慈むかのやうに、マントル・ピースの上から、この夏釋迢空さんが僕たちのために書いて下すつた朱の短冊が、莊嚴に見下ろしてゐる。

人も馬も道ゆきつかれ死ににけり、旅寝かさなるほどのかそけさ

一九三八年

讀書の日々

ヴェランダにて

一九三五年晩秋。或高原のサナトリウムのヴェランダ。二人の患者の對話。

A 君はよくさうやつて本ばかり読んでゐられるなあ。

B うん。どうも書くことを禁ぜられてゐると、本でも読んでゐるより他に時間のつぶしやうがないからね。しかし、かうやつて本でも読みながら、それとなく次の仕事のことでも考へてゐるうちが、僕等には一番愉快なのだよ。

A その本は何だい？

B これか。これはジャック・リヴィエルの「フロオランス」といふ小説だ。これを書きかけで、この可哀さうな男は死んでしまつたのだ。

A リヴィエールつて「エテユウド」を書いた奴かい？

B うん、あいつだ。あの「エテユウド」を翻譯した連中に云はせると、リヴィエールなんて

いふのはまるで希臘神話の中の龜みたいな奴で、生れつき飛べないくせに自分でも飛ばうとして、驚かなんぞに引張り上げて貰つたが、途中で墜落してしまやあがつたと云ふのだが、——ほら、そんな繪があの本の表紙についてゐたらう？——随分怪しからんことを云ふと思つて、すこしリヴィエエルが可哀さうになつてゐたが、どうもこの「フロオランス」なんか讀んでみると、それも半ば肯定したくなつてくるね。……僕はすつと前から、この「フロオランス」といふ小説の草案のやうなものだけは知つてゐた。随分面白いものになりさうで、大いに期待してゐた。それがやつと今年の春に——リヴィエエルが死んでからもう十年になるが、——單行本になつたので、早速取り寄せて貰つたのだが、讀んでみたら草案などで想像してゐたのとはまるつきり違ふ。期待が大きかつただけ、それだけ失望も大きいのだ。

A そんなにつまらないのかい？

B うん。つまらないと云へばつまらないけれど、さう簡單にも片づけられないね。ただ、どうも僕の想像してゐたのとまるつきり違ふんでね。どう違ふかといふと、その草案などで見ると、リヴィエエルは非常に小説らしい小説——例へばメレデイスみたいな客觀的小説を書きた

がつてゐるのだね、少くとも讀者を「リヴィエエルではない何物かの眞中に投ずる」やうな小説を意圖してゐる、——が、出来上つたものは、いや出来上りかかつてゐたものは、まるで論文みたいな小説なんだ。どこまでもリヴィエエルがつき纏つてゐる。「エテユウド」の臭ひがする。これはエテユウド・ブシユロジツクか。……しかし、途中でつまらなくなつて何度かはふり出さうと思ふんだが、それでもやつぱり最後までかうやつて讀んでゐる。何が僕にこの本を棄てさせないのかしらと、讀むのに倦いては考へて見るんだが、そんな時にひよつくり死を前にしながらこの小説を書いてゐるリヴィエエルの悲痛な姿が浮んでくることがある。……僕は前に彼の妹の書いた回想記を讀んだことがあるんだ。それに據ると、リヴィエエルは死ぬ一年ばかり前にこの仕事にとりかかつてからと云ふもの、それまで長いことすつかり失つてゐた少年時代の無邪氣な様子、——殊に遊戯なんぞに夢中になつてたときのやうな様子を取りもどし出し、さうしては口癖のやうに「僕にだつて小説が書けることを皆に分らせてやるんだ」と云つたり、「ああ早くこの本の出来上るのを見たいがなあ」と子供のやうに氣短かになつたり、又、ラジイゲの死んだ時は「僕もこんな風に死んでゆくんだよ」などと妹に云つたりしたさう

だ。そんなに大事だった小説を書きかけで死んで行かなければならなかつた男、しかもその書きかけの小説すら恐らく彼自身の期待からもひどく外れてしまつてゐたであらうこと、最後になつて遂に自分の才能を自覚しなければならなかつたこと、そんなことを考へたら誰でもこの小説を最後の頁（痛ましくも中絶されてゐる……）まで読んでやりたくなくなるだらうぢやないか。すこし感傷的になつたが、もう止さう。さうして別の方から出なほさう。どうも僕はこんなことを喋舌つてゐるうちに、「フロオランス」にあるのはそんなものだけぢやないことに気がつき出してきたんだ。——やつぱり、この小説なんぞでも、作者は本の中にちやんとした主題を置いてゐるね。眞剣になつて何か云ひたがつてゐることのあるのが、読者にも知らず識らず通じてくるのだ。だから、それをすつかり聞いてしまはないうちは、やつぱり途中で止められないのだね。

A 西洋の作家はそこが日本の作家と違ふな、僕などはあまり讀まないが、ときどき日本の小説を讀む度毎に考へさせられるんだが、一體何か云ひたいものを持つてゐてそれで書いてゐる作家が幾人ゐるのだい？

B ……………

A で、その「フロオランス」といふのは、何を書かうとしてゐるの？

B *Le vent se lève, il faut tenter de vivre.*（風が立つた、生きんと試みなければならぬ。）——ヴァレリーの詩句だが、これがこの小説の題辭（エピグラフ）になつてゐる。一番簡単に云ふと、さういふ生きんとする試み——その苦しい試みをピエエルがいかに超えていつたかが、その主題だ。もうすこし精しく云ふと、ピエエルとフロオランスとの出會、彼等の戀愛、昔の戀人に奪回されるフロオランス、彼の嫉妬、——さういつた人生との痛ましい苦闘のち、遂にピエエルは自己の快樂を犠牲にして再び元の自己へ、神の許へ歸つてゆく。（その結末のあたりは未完に終つてゐるが、序文でリヴィエルの細君がさう解説してゐるのだ。）——まあ、さういつたやうな境遇の心理的研究のやうなものになつてしまつてゐる。リヴィエルのねらつてゐたやうな小説的興味などはちつとも起らない。フロオランスといふ女だつて、ちつとも描けちやゐない。……この間讀んだモリアックの「テレエズ・デケルウ」なんぞに比べたら、まるでなつちやゐないのだ。……ただ、あの生眞面目で、氣どりやのリヴィエエルが人生に對して持つて

ゐた愛、生の悦びを味へるものなら何でもかんでも手に入れようとしてゐた意慾、さういつたものだけが悲しいまでに僕を打つてくるのだ。さうしてそれだけだ。が、本當にそれは悲しいまでになのだ。……

A そのモリアックの小説つて、どんなの？ その何とかいふ……

B 「テレエズ・デケルウ」か。これはもう素晴らしい小説だ。數年前、僕がはじめて小説を書き出さうとしてゐた頃にコクトオやラジイゲの小説を読んで非常に刺戟されたものだつたが、まるであの時分みたい僕はこの小説を読んで昂奮してゐる位なのだ。この一二年といふもの、僕もなんか小説の上で行きづまりかけてゐてひどく心細かつたが、モリアックを知つてからといふもの、急に行手が明るくなつたやうな氣がしてゐるのだ。——が、かういつたモリアックのやうな行き方は、仕事としては一番難かしさうだが……

A 一體どんな行き方をしてゐるのだい？

B どんな行き方つて、さう、ごく大きつばに云ふと、ドストエフスキイやブルウストみたいな掘り下げ方をしてゐる。恐らく彼等から随分影響を受けてゐるのだらう。そしてかなり深

くまで行つてゐる。が、ああいふ龐大なものぢやない。みんな二三百頁位の作品で、ごく濫い、クラシカルな額縁のなかにちやんと嵌まつてゐる。そんなところは、その古典的な形式を僕が愛してやまないジイドの「窄き門」を思ひ出させる。そんな一方では、モリアックは口を極めてラジイゲの「舞踏會」を賞めてゐるし、コクトオの小説すら愛してゐるらしい。コクトオの小説の中にある「フェアリーとバセティックとの混合」は珍重すべきなどと云つてゐる。……ともかくも、今名前を擧げたやうな作家たちを、まるで打つて一丸としたやうな作家なのだ。以上の作家たちは、いづれも僕のこれまで特に勉強してきた作家たちだ。——さういつた要素が何もかもあるやうなこのモリアックを、僕が好きにならざるを得ないぢやないか。ただ、すこし困ることがあるんだ。それはモリアックがカトリック作家であることだ。そのために僕はいまままでつい彼を敬遠してゐたのだが、それがまたいつか僕を彼から引き離すやうなことになるかも知れんね。どうも僕は一生カトリックにだけはなれさうもないからなあ。だが、僕のこれまで讀んだ彼の作品——ことに「テレエズ・デケルウ」なんかぢや、そんな宗教臭いところは何處にもないね。モリアックがカトリックであることを知らなかつたら、全然

そんな要素には気がつかずにしまふのぢやないか知らん？

A でも、作家がカトリックである以上は、全然そんな要素のないわけではあるまい。

B うん、それが一番モオリアックを苦しめてゐる問題でもあるのだらうね。こんなことを云つてゐる、「私は作家だ、私はカトリックだ、そこに争闘があるのだ。」カトリックであることは作家にとつては幸福だが、作家であることはカトリックにとつては甚だ危険なことだ」と。

——ところで、そのカトリシスムなるものが、僕等にはなかなか解らないのだよ。ポオドレエ
ルにしる、ランボオにしる、又、ユクトオのやうなものまでが、最後にはカトリックになる
ね。あの氣持だな、あれがちよつと解るやうな解らないやうな氣がするのだ。恐らく誰に訊い
てもはつきりとは答へられまい。ちやうど東洋の詩人が最後にはすべて虚無のやうなものに還
つてゆく、ああいつた氣持にそれが何處か似てゐるやうでゐて、まるで正反對なのではないか
と思ふ。たとへば、モオリアックだな、その「テレエズ・デケルウ」と云ふのは、夫を毒殺し
ようとして未遂に終る女のことを書いてゐるのだ。さういふ恐ろしい女主人公を、モオリアッ
クは少しも憎まうとしてゐない。それどころか非常に優しい愛情でもつて包んでやつてゐる、

自分の惨めなことを知つてゐるこの女が好きで好きでたまらないやうなところが僕等にも感ぜ
られる、そしてさういつたものがこの小説の調子をリリカルなものにさへしてゐる位だ。が、
それに引きかへ、彼女の周囲の者は、ことにその俗人ではあるが善良な夫などは徹底的に冷酷
に取り扱はれてゐる。むしろ戯畫化さへされてゐる。——恐らくモオリアックの愛してゐるの
は、テレエズの痛々しいままで不安なのであらうし、はげしく憎んでゐるのは、夫やその他の
人々の世俗的な自己満足なのであらうと思はれる。——そしてそれだけが僅かにカトリック的
と云へば云へないこともないだらう。

A それがどうしてカトリック的だと云ふのだい？

B 僕にも相變らず解つたやうな解らないやうな始末なのだが、まあ、さういつたものがカト
リック的なのだとして置いて貰はうぢやないか。この問題は、もうすこしお預けた。そのうち
だんだん解るかも知れん。——ともかくも、さういふ問題は抜きにしても、この小説は素晴ら
しいものだ。この可哀さうな毒殺女の氣持のよく描けてゐることと云つたら！ 恐らく讀者に
は、テレエズ自身によりも、彼女の夫を毒殺するに至るまでの心理ははつきりと辿れるのだ。

何故ならテレエズには、彼女自身のしてゐることを殆ど意識してゐないやうな瞬間があるのだが、さういふ瞬間でさへ、読者は、彼女がうつろな氣持で見つある風景や、彼女の無意識的な動作などによつて、彼女がその心の闇のなかでどんなことを考へ、感じてゐるかを、知り、感ずることが出来るのだ。——こんな具合に読者を作中人物の氣持のなかへ完全に立ち入らせてしまふなんて云ふのは、君、大した腕だよ。それがこれほどまでに成功してゐる例は滅多にあるものぢやない。

A ラジイゲの「舞踏會」はさう云つたところがあるんぢやない？ 僕などはあの女主人公の心理にぐんぐん引つぱられて行つたものだがなあ。

B さうだ、あれも大したものだつた。誰かが云つてゐたが、「この女は自分ではかうなのだと信じてゐる……が、實際はかうなんだ……」なんて云つた調子で、知らず識らずに自分の感情を間違へてしまつてゐる、それほど豊富で複雑な感情をもつた人々が實に微妙に描き分けられてゐたが、いま考へると、あの小説の唯一の缺點は、あまりにラジイゲが自分の作中人物を支配しすぎてゐたことだ。モオリアックを読んだあとなどではそれが特に目立つ。モオリアッ

クはむしろ反對に自分がその作中人物に支配されることを好む。いつのまにか作中人物が彼等の裡にある運命曲線を一人ですんすん辿り出す。作家はただそれについて行くだけになる。作中人物が生々としてくれればくるほど、ますます彼等は作家の云ふことをきかなくなるものだ。しまひには作家をまるで思ひがけないやうなところまで引つぱつて行つてしまふ。それは作家にとつては大成功だ。——だが、モオリアックなどには、カトリックとしての立場から、それがまた随分苦しい争闘になつてくるのだらうね。

A ぢや、さつき君の非難してゐた「フロオランス」などはどうなのだい？

B さう、あれはまるでぢつとしてゐる肖像畫みたいなのだよ。——才能の相違かな、作家として考へて見ると、例へばそれは兩者のモデルの扱ひ方にあるのだと思ふ。先づ、リヴィエルの「フロオランス」だが、これには實在のモデルがあるのださうだ。一つにはそのモデルへの顧慮からも、發表をひかへてゐたのだが、そのモデルになつた女性が亡くなつたので、漸くこの遺稿が上梓されるやうになつたといふ話も聞いてゐる。それほど、リヴィエルは、そのモ

デルを出來るだけそつくりそのまま生かさうとしたらいいのだね。生れつきさういふ性分であるらしい。批評の場合は、その對象に何處までも忠實について行かうとする、さういふ誠實さが誰にもましてリヴィエルの批評の強味であり、屢々それが見事な成功を収めてゐるが、小説の方はなかなかさうは行かないのだ。小説にあつては、リヴィエルに最も缺けてゐるもの——想像といふものが大きな力だからだ。その力なくして、モデルをそつくりそのまま生かさうとすればするほど、モデルは靜物化する——モオリアックは、小説の技術といふものは、さういふ現實の「再^{ムラロテラ}現^{シヨ}」ではなくして、現實の「置き換^{トランスポジション}へ」であるとしてゐる。つまり現實は單なる出發點たるに止め、作家はその漠然たる可能性を實現さすべきであり、その結果人生がとつたのとは反對の方向をとるのも好いとしてゐる。「テレエズ・デケルウ」もその一例で、少年の頃、重罪裁判所で見かけた、一人の瘦せた毒殺女がそのモデルになつてゐる。贗の處方箋で毒藥を手に入れることだけ、現實から直接に借りたが、現實はそこで打ち切られ、それから先きは、實際の女とは全然別な、ずつと複雑な性格に仕上げたのだ。實際は、その女の動機は甚だ簡單で、他に情人があつたからなのだが、小説の「テレエズ」では、彼女自身は、何が

彼女をそんな犯罪にまで驅りやつたのか全然意識してゐなかつたやうに、悲劇が仕組まれてゐるのだ。

A 何故その女は自分の夫を殺さうとしたか、作者も一切説明してゐないのか？

B 何處にも説明らしいものは見あたらない。ただ前にも云つたやうに、その女をそんな行爲にまで驅りやつた漠然とした動機は、我々にはその女自身によりもいくらかはつきりと感ぜられる位のものである。ただ、その小説の結末になつて、夫が遂にテレエズを許して、巴里に連れてゆき、其處に彼女を一人だけ残して再び田舎へ歸つて行かうとする際、夫ははじめて優しく妻に「どうしてあんなことをしたのだ？」と問ひかけると、テレエズは「いしましたがそれがやつと分りました。それは貴方のうちに不安を見出したかつたからかも知れません」と答へてゐるのだ。それからまた彼女に「私は私の手がためらふときしか自分を残忍な女だとは思ひませんでした。……私は恐ろしい義務に負けたのです。さうです、それはまるで義務のやうでした」とも云はせてゐる。これらのテレエズの言葉が、見方によつては、小説全體の上に強い光を投げつけ、彼女のそれまでの憑かれたやうな行爲の一つひとつを異様に照らし出すやうに思へな

いことはない。さうしてテレエズの夫のやうな、自分に満足し切つて、いくぢのない平和を貪つてゐる人間の裡に、はげしい不安を呼び醒まさすにはおかないやうな恐ろしい義務、テレエズをしてあんな惨めな行爲に驅りやつたもの、——さういつたやうなものが同時にまた、この「テレエズ・デケルウ」を書いたモオリアックのカトリックとしての唯一の口實なのではないか。そんな氣がする。少くともいまの僕にはそれだけしか解らん。

一九三六年四月二十六日

山の宿にて

ハイネのロマンツェロなどは、數ヶ月の間に病苦と闘ひながらも一氣に書き上げて、それはじめから一卷として世に問うたものらしい。ああいふ慟哭的な詩などは一篇々引きちぎつて讀まされるよりも、一卷として讀みとほすことによつて、我々の感動は別して強まるのである。その他、ヴェルレエンの「叡智」と云ひ、リルケの「時禱書」と云ひ、又コクトオの「ブラン・シャン」と云ひ、さういふ連作體の詩としては最高度のものであらう。さういふ一卷をなさずともいい、せめて十篇位でいいから、さういふ連作體の詩の試みも若い詩人たちにやつて貰ひたいと僕は思ふのである。現代詩人の複雑な心情はもはや十行やそこいらの詩の中にははひり切らぬのならば、一篇々としてはいくら物足らぬところがあつてもいい、それら數篇が相寄つて互に補ひ合ひながら、はじめて一心情を形成する、——さういふのが連作體の詩の特色である以上、野心的な詩人たちには小説などに手を出すよりは、ときどきさういふ詩作を

もして貰ひたいのである。それは、海がその深みを加へれば加へるほどその青みを増すやうに、それらの詩を積み重ねれば重ねるほどその心情の凄みを増すやうなものであらしめたい。

又、野心のある詩人たちには時には長い詩も書いて貰ひたいものである。『四季』などでは、詩は大抵二頁位にきちんと収まつてゐる。ほとんど毎號々々さうなのである。清潔ないい感じはするが、すこし几帳面すぎはしまいかと思ふ。ときどきは何頁めくつても、その詩がいつまでもいつまでも續いてゐる、——讀んでゆけばゆくほど、讀者の心は引き裂かれさうになり、或は云ひやうもなく靜まつてゆく、そんな詩が讀みたいものである。現代ではそんな詩をものすことはますます不可能に近くなつてゐる、——さういふ嘆きは誰もかも抱いてゐよう。それだけ、さういふ奇蹟のやうな詩の出現も、野心のある詩人たちには望みたいのである。

僕はゆうべ、この山の宿で、靴の中に入れてきたリルケの「鎮魂曲」の英譯本をとり出して、そのうちの「或女友達のために」の一篇を讀んだのである。これは二百七十行からもある長篇

である。この春、その原文を辭書と首引きで讀んだときなどは、僕の例の氣まぐれな讀み方では、讀み了へるのに二三日もかかり、それでもまだ半分以上も解らないところを残したのであるが、——いま、比較的讀みやすい英譯で讀み直してみても、相變らず解つたやうな解らないやうなところが多い。が、ところどころ解し得た詩句からは何ともいへず清冽な光線が發せられてきて、それが依然として暗黒である前後の詩句の上をかすかに明るませ、それがひよいと一瞬間解つたやうな、しかしまだ何となく腑に落ちないやうな氣もちに僕をさせる具合も、それもまたそれでなかなか愉しいのである。

「リルケがウォルプスウエデの繪かき村のなかで暮らしてゐる間に書いた日記の中には、後に彼の妻となつた女流彫刻家クララ・ウエストホフに對するばかりでなく、「ブロンドの鬨秀畫家」パウラ・ベッカアに對する數多の仄めかしが見出される。その後者に對しても、彼が非常に深い愛情をもつてゐたことは、疑ふことが出來ない。これ等の二人の少女と共に、語り合

つたり、音楽を聴いたり、自分の詩を自分で朗讀したりしながら過した夜々の、彼の記述は見事である。彼が「形象詩集」中の「少女の歌」を書いたのは、それらのうちの一夜の後だった。パウラ・ベツカアは畫家オットオ・モオダアゾオンと結婚したが、その後間もなく産褥中に死んだ」と、英譯者J・B・レイシユマンは、「レクキエム」の莊嚴なる一篇をもつてリルケがその死を哭した、その「或女友達」のことをノオトしてゐる。

詩人の微妙なる筆は、冒頭、若くして逝けるものが、生者のところに歸つてきて、何か忘れていつたものを捜し求めるかのやうに、おづおづとさまよひ歩いてゐる姿を描いてゐる。彼女の求めてゐるものは何であるか？

言ひなさい、私は旅に出ようか？

お前は何處かに、或物を残してきたのだが、

それがお前のところに來ようとして苦しんででもゐるといふのか？

お前の五官の他の半分のやうにお前に似てゐるけれど、

お前がまだ見たことのない田舎に、私は旅しようか？

その田舎で、私は園丁に多くの花の名前を暗誦させ、その美しい特有の名前の破片の中に入れて多くの香の残りを持ち歸らうか？ それともまた、その地方がその青空までもその中に存在してゐるやうな、果實を買つて來ようか？

何故ならお前は熟した果實といふものをよく理解してゐたから。

お前は自分の前の皿のなかにそれを置いておいたものだ、

そしてその重味を色彩でもつて測つたものだつた、

そして女たちも、子供たちも、お前には果物のやうに見えたものだつた、

兩者とも内部からさういふ生感の中に押しやられてゐるのだ。

そして遂にお前はお前自身を果實として見るやうになり、

お前自身をお前の着物から引き出して、鏡の前に運び、

それをお前の見るがままに委ねて置いたものだつた、

するともはやそれは「あれは私だ」とは言はずに、「これが私だ」と言ふのだつた。

それほどお前の凝視は好奇的ではなくなつてゐた。

無一物で、本當に貧しく、それはもはやお前自身をも欲せぬほどであつた、

それほどお前は神聖になつてゐた。……

そんな風に、——お前が鏡の中に深く、そしてすべてのものから遠くに、お前自身を置いてゐるときのやうに、私はお前を保つてゐたいのだ。それなのに、何故お前は異つた風に來るのか？ 何故お前はお前自身を呼び戻すのか？——さういふ彼女は、死によつて中絶された仕事を仕上げたがつてゐるのではないか？ 彼女が憤まじやかに、名聲には無頓著に、唯自分のうちに強くつて自由な魂を成熟せしめようと努力してゐた時、外部から突然、他の勞役——「母になること」が現れたのであつた。彼女は突嗟に、彼女が自分のうちに養つてゐたものは死であることに氣つき、そして、自分の血のすべてがそれに本能的に反抗するにも拘らず、それを彼女は穩かに受け入れた。……そんな風に、彼女を母とらせて死なしめたのは、彼女を所有して居り、彼女を意のままに出來ると思つてゐた彼女の夫であらうか？ いや、それよりむしろ、それは彼の中の男である。しかし、自分の愛するものを所有する權利などを持つてゐる男など、何處にゐる？ 自分自身をさへ保つて居れず、ただ子供がボオルでするやうに、ときど

き運よく自分自身を掴まへては、再びそれを投げるやうな者どもに、どうして愛人を所有など出來よう？

——さういふ重々しい慟哭的な、しかし嚴しく制御せられた調子が、全篇をも悲しげに流れてゐる。そしてこの者のやうな若くして純潔なる犠牲者の例から、いかに人生と偉大なる仕事との間には昔ながらに大きな敵意があるか、といふ永遠の法則が抽き出され、それが高調さ

れてゐる。

そして詩人は最後にかう結んでゐるのである。

歸つていらつしやるな。もしお前に我慢ができたなら、死者と俱に

死んでいらつしやい。死者にはたと仕事がある。

が、私に助力して下さい、それがお前の氣を散らさない範圍で、

遠方のものが屢私に助力して呉れるやうに、私の裡で。

一九三六年八月八日、信濃追分にて

クロオデルの「能」

ボオル・クロオデルの「能」といふ小論文を読んだのは、もう二三年前のことだが、丁度はじめて友人に連れられて行つて能といふものを見だした時分だったので、随分面白く思つて讀んだ。又、當時能の見方にもいろいろ啓發されたのである。それから能をかなり見て來た。そしていまだに能といふものをこんなにもみづみづしいものだと思つてゐるのは、全くこのクロオデルの小論文のお蔭だと言つていいかも知れない。

「劇とは何事かが到來するものであり、能とは何びとかが到來するものである」といふ彼らしい莊重な定義をいきなり冒頭に置いてから、クロオデルは、先づ、橋懸りと本舞臺とからなる舞臺の説明から始め、それから能の音楽——囃子と地謡と——を紹介する。それらの囃子の中で、あの哀調に充ちた笛を「過ぎゆく時間の我々の耳に對するときをりの轉調、演者の背後で

の時間と瞬間との對話」であると言つてゐるなどは面白い。又、地謡——これは、ギリシヤ式に合唱 (Le Chœur) と云ふ言葉を使つてゐるが——は筋には關與せず、單にそれに非人格的な註釋をつけ加へるものだと紹介してゐる。それは過去を語り、風景を敘し、イデエを展開させ、登場人物を説明し、詩又は歌曲によつて應答する。「それは物語る彫像の傍らにうづくまつたまま、夢み、私語するのである。」

さて、次に登場人物が説明されてゐる。それは二人きりである、即ちワキとシテである。そのいづれも一人が數人のツレを伴つてゐることもあり、又、ゐないこともある。

ワキは凝視し、待ちうけてゐる者である。彼は決して面をかぶらない。彼は普通の人間なのである。

舞臺はワキの出によつて、靜かに始まる。正面までしづしづと出てきたワキは、我々に向つて、名乗りを上げる。例へば、諸國行脚の僧などである。それから彼はワキ座につく。そして橋がかりの方へ目を据えて、彼は待つてゐる。

彼が待つてゐる、と何びとかが現はれてくるのである。

神、英雄、仙人、亡霊、鬼など、——シテはいつも見知らぬものの使者である。そしてそれに準じて彼は面をつけるのである。それはワキに自分を發はいて呉れるやうにと希求する、覆フひ隠れた、秘密な何物かである。その歩き方と所作は、それを引きつけそれを彼の想像地帯に囚へたままにしてをるところの、ワキの眼差しの函フ數である。例へばそれは、その亡霊がその殺害者に一步步近づかうとする、殺された女などである。——ワキは、長い間、彼女の上に目を据ゑてゐる、看客は彼を見守つてゐる、彼は目ばたきさへしてはならない。……ワキは尋ねる、シテは答へる、地謡が註釋する。そしてこの面をかぶつた、悲愴なる來者は彼をそんな風に來らしめた者に、涅槃をもたらず。そして彼（シテ）は音樂でもつて、像イマージュと言葉との圍イひを組み立てる。

それから間になる。通行人がやつて来て、ワキに、對話の調子で低聲に問うたり、又説明したりする。

さて、後の場になる。ワキはその役目を了へる、そしてもう傍觀者に過ぎなくなる、一瞬間

引つ込んでゐたシテが再び現はれる。彼は死から、粗描から、忘却から出てくるのである。彼は着附を換へ、ときには變形する。いまや全場面は彼のものである。彼はその魔法の扇でもつて、現在を蒸氣のやうに追ひ拂ひ、そしてその不思議な衣のゆるやかな風でもつて、もはや存在して居らぬものに、彼のまはりに浮び上がるやうに命令する。他の者らがそれに續けるに従つて消え去つてゆく彼の詞ことばの魔術によつて、地下の光景が漸く灰の中からはつきりと浮んでくる。シテはもはや物語らぬ。彼は僅かの言葉、僅かの抑揚にみづからを制限する、そして地謡が一種の非人格的な歌唱で、シテの代りに、肉體的及び精神的風景を展開させる役目をする。シテは左右に走り、確かめ、證明し、展開させ、又所作をする。そして姿勢と方向との變化によつて、夢幻劇のすべての推移を示す。驚くべき逆説パラドクスによつて、それはもはや演者の内部にある感情ではなくして、演者が感情の内部に入つてしまつてゐるのである。……

かくのごとく能の構成を説明してきたクロオデルは、今度は、その全體としての印象を與へようとする。それが夢に似てゐること、演者が一種の催眠術的狀態の裡に動いてゐること、そ

して泣いたり殺したりするには、唯、眠りに重たくなつた腕をもち上げさへすればよいことなど。そして光つてゐる面の上を滑りながら足の指を上げたり下げたりなどしてゐる演者については、「その各々の動作は、大きな衣裳の重みと襲と共に、死に、打ち克たんがためのものであり、又その動作の一々は、失へる熱情の、永遠の中における緩やかなる模寫であると言へよう。」——「影の國から連れ出されて、それが我々の冥想的な眼差しの裡に、自ら描くところの生なのである。」——「我々は我々のいかなる行爲をも、不動の状態において見るのである。動きにはもはや意味しか残つてゐないのである。」——「我々の目の前に一瞬間形づくられる彫像のごとくに、夫が、その妻を見つめようとしないうでその前を通り過ぎようとする刹那、その愛する者の肩の上に置いた手のなかの何といふ優美さ！　そして繪入新聞の中に見かけらるるごときかかる悲哀の俗な動作も、それが緩やかに、注意ぶかく、演ぜられるとき、何んとそれは深い意味をもつことだらう！」

クロオデルはかくのごとく能の美しさを説きすすみながら、更らにかかる能の歴史、謡曲の

文學的性質、さては能の衣裳、面、扇などにまで独自の見解を加へてゐる。例へば、扇についてはかう書いてゐる、

「この彫像の上で、それは顫へてゐる唯一のものである。それはその彫像の腕の先にただ一つきりある人間的な葉むれである。そしていましがた私が言つたやうに、それは翅のやうに、思考のあらゆる態を眞似る。それは色彩組織を變へ、心臓の上でゆるやかに打ち、又、不動の顔の代りに震へる、金と光との點である。それは手のなかに咲いてゐる花であり、炎であり、鋭い矢であり、思考の地平線であり、魂の顫動である。『蘆荊』の中で、長い別離のあとで、夫と妻とが再會するとき、二人の感動は、二人の息づかひを一瞬間ごつちやにしてしまふ、二箇の扇の顫動によつてのみ表現されるのである。」

一九三七年六月

Ombrà di Venezia

154

きのふからギイ・ド・ブウルタレの「伊太利におけるニイチエ」といふ本を読み出してゐる。忠實な傳説ではないかも知れないけれど、なかなか面白い。いま讀んでゐるところは、ニイチエが三十六七の時、獨逸を去つてはじめて伊太利に赴き、先づ最初ヴェネチアに滞在してゐた頃（一八八〇年三月——六月）の有様を敘した一章であるが、ここに描かれてゐるニイチエの姿には、これまであまりにも屢々ニイチエといふ名の下に描かれてきた狂暴なデイオニソスのな人間とはかなり相異した、すつと我々には親しみ深く思はれるものがある。私はさういふヴェネチアにおけるニイチエの姿をブウルタレから少し抄して置かう。——

ヴェネチアでは、ニイチエは、或るバロック式の古い館の、大理石を敷きつめた大きな室の中に住んでゐた。そこから聖マルコ寺院までは、埃のない、日蔭の多い、もの靜かな通りを、三十分位で散歩して來られた。ニイチエの大好きであつたヴェネチアの日蔭、——それは彼の

その時書いてゐた本（即ち「曙光」^{モナゲレネチ}）が長々として「*Ombrà di Venezia*」（ヴェネチアの日蔭）といふ題をつけられてゐたほどであつた。彼の生活は細心に規則的であつた。毎朝七時か八時頃から仕事にとりかかる、それから散歩と粗末な食事。二時過ぎになると、友人のベエター・ガストがやつて來る。このベエター・ガストといふ男は、バアゼル大學時代からのニイチエの教へ子で、いまは作曲家を志してゐる。ニイチエをヴェネチアに招んだのはこのガストであるが、いまはもうこの男だけがニイチエの忠實な友人であり、原稿の淨書やら、口授筆記やら、病氣の世話やら、何から何まで面倒を見てやつてゐる。そのガストが暫らく一緒にゐてから歸ると、又改めて七時半まで仕事をする。すると再びガストがやつて來て、夕食を共にする。ときには半熟の卵と水だけで済ましてしまふこともある。それから大概、一緒にガストの家に行つて、代る代るピアノを弾き合ふ。ニイチエは自分で作曲したものを弾いたり、即興曲をやつたりする。ガストはショパンに私淑してゐて、彼の曲ばかり弾いてゐる。このヴェネチア滞在中くらゐ、ニイチエは音楽に親しんだことはなく、そして彼はもはやショパンのみしか愛さなくなつてゐた。

155

ショパンとニイチエ。——この二人の病人、この二人の純潔な情熱家、この二人のいたるところを漂泊する孤獨者の間には、魂の血縁といふやうなものがありさうである。この二人の中で和音をして顫動してゐるものは、先づ、生きんとする劇的な悦びであらう。それから更らに附け加へたいものは、懷疑の裡に仕事をするこの愉しさ、——恐らくそれは、氣高い方法で苦しむこと、そしてそれを意識してゐること、それからまた、ありふれた光榮を約束させるやうな愚鈍な誠實さよりも寧ろちよつとした短い叫びの方を選ぶことの楽しみ、とでも云ふべきであらうか？ とプウルタルは穿鑿してゐる。

ワグネルが「トリスタン」を作曲したのは矢張りこのヴェネチアであり、後年自らその作品は、「あの素ばらしいヴェネチアを音楽化したもの」であると言つてゐるが、ニイチエもまた、その「曙光」の中で彼のヴェネチアを音楽化してゐると言へよう。その内的なヴェネチアは、彼が散歩をしながらだの、カッフエに休んでゐる間だのに取つたさまざまなノオトの間から、まるで新しい歌のやうに聴えてくるのである。

後年、ニイチエは「この人を見よ」のなかに當時を回想しながら、かう書いてゐる。「一體

私は音楽にいかなるものを欲してゐるかに就いて、最も選ばれたる讀者諸君のために一言したい。音楽は、十月の午後のやうに快活にして深いものであること。それは獨特で、奔放で、そして柔軟であり、可憐なる少女のごとく狡くてしかも優雅であること。……由來、獨逸人のごときものに音楽の何たるかが解せられようとは私は思ひも及ばぬ。獨逸音楽家と稱せられてゐるものは、ことにそのうちの最も偉大なるものは、外國人である。スラヴ人か、埃太利人か、伊太利人か、和蘭人か、——或は猶太人である。さもなくば、ハインリヒ・シュッツやバッハやヘンデルのごとき優秀なる種族、今日では既に亡びたる種族の獨逸人である。私自身は、シヨパンのためになら他のあらゆる音楽を犠牲にしてもいいと思ふほど、自分が充分に波蘭土人であることを感じてゐる。私は三つの理由からワグネルの「ジイグフリード牧歌」を例外としたい。又、そのオオケストレシヨンの崇高な抑揚によつて他のすべての音楽を凌駕してゐるリストの或物、それから又、アルプスのあちら側で——今ではこちら側だが——生れたところのすべてのものも例外としたい。……私はロッシニなしにはすまされない、又それと同じ位、音楽における私の南方、わがヴェネチアの大作作曲家ベエター・ガストなしにもすまされない。

そして實は私がアルプスのこちら側といふのは、ただヴェネチアだけを指してゐるのである。もし私が音楽をそれで代用させるやうな一語を求めるとしたら、私はヴェネチアといふ一語をしか見出さないであらう。私には涙と音楽との區別をつけることは出来ないのである。……」

一九三六年五月三日

ゲエテの「冬のハルツに旅す」

ゲエテの「冬のハルツに旅す」の斷章にブラアムスが附曲したアルト・ラブソデイを、一週間ばかり前からレコオドでをりをり聴いてゐるが、どうもそれを唱つたオネエギンといふ女のひとの、すこし北歐訛りのある陰影に富んだ、底光りのする歌ごゑがすつかり耳についてしまつてゐる。夜など、ふと目をさますと、その歌が耳の底から蘇つてくるやうである。……しかし、ずつと病牀にゐる私は、ついおつくうにしてそのドイツ語の歌詞を分らないままにしておいたが、けさ漸く小康を得たやうなので、ゲエテの詩集をもつて來させて、それを讀んでみた。かなり難解な詩であつて、二度三度と讀みかへして、漸くその詩の意味が分かるやうになつた。手もとにある鷗外の「ギョオテ傳」をみると、一七七七年十一月末、カルル・アウグスト公が昵近の士を連れて獵に出たとき、ゲエテは獨りハルツに旅した、そのときの詩のやうである。病牀にあつて、私はかういふ旅するゲエテの姿を描き出してゐた……

重くろしき雲の上に

軽ろやかに翼をさめて

獲物ねらふ秃鷹のごと

わが歌を翔りやらん

旅人はさう氣負ひながら、冬の朝まだき、獵に出る友人らと袂を別つて、獨り、北に向いてハルツを目ざしてゆく。雪をはらんだ雲は、さういふ彼に抗ふやうに、低くおもく、垂れこめてゐるのである……

旅人はをりをり二三日前に會つた一人の青年の不幸な姿をおもひうかべる。その厭世的になつてゐる青年がそれまで何度も手紙を寄こして彼に救ひを求めてゐたので、彼はこの度の旅行の途中、わざわざその青年に會つていろいろ意見をしてやつたが、その甲斐もなかつたのである……

旅人の胸は、人皆にはそれぞれの道が神によつて豫示せられてゐて、或者は幸福への道に、また或者は苦難への道に向はざるを得ないといふ事で、いふべからざる苦惱をおぼえる。さう

いふ人生のすがたが、いま彼の直面してゐる自然の中にもさながら見える。この山中の荒涼とした様子はどうかだらう。何物も目には入らず、只をりをり餓急切つたやうな小動物だけがそのみじめな姿をさらすばかりである。——いま、旅人の目には、はるか彼方、氷つた湖の向ふに、一つの町が見え出してゐる。ああ、おそらく彼處には幸福なる人々が、蘆の間にかくれてゐる雀たちと共に、憩うてゐることだらう。「己もきのふまでは彼處で彼等と共に無事な日を過してゐたのだ……」

それと同時に、彼には再び、あのかはいさうな、無益に人生に抗してゐるやうな青年のすがたが、こんな心象でまさまさと泛んでくる。

されどかしこに孤り立てるは誰ぞ。

彼れが掻き分けゆくは藪ならずや。

その過ぎし跡に灌木はふたたび枝さしかはし、

踏まれし草も身を起こせり。

何たる荒蕪の彼れを呑まんとする！

ブラアムスのアルト・ラプソディのはじまるのは此處だ。詩の氣分の高まりと共に、オネエギンの力強い獨唱は、かくして道にはぐれていつた不幸な若者に對する如何ともしがたい憐憫でいよいよ沈痛を加へる。いまは香料すら毒のやうにおもひこんでゐるもの、人を愛しすぎたがために却て厭人的になつてしまつたもの、はじめ人から侮どられて遂に人を侮どるやうになつたもの、充たされぬ自己の欲望のためにいつか自分自身をも知らず識らずの裡に蠶食してゐるそのやうな不幸なものを、一體誰が慰め得ようか？

愛の父よ、おんみの豎琴の上に

彼れの耳にも入りうべき

調べのひとつだにあらば

かれが心を慰めたまへ

此處から徐かに男聲合唱がアルトに絡みはじめ、低いオオケストラを伴奏にしながら、旅人の同情は遂に一つの大きい祈りにまで高まつてゆく。……かかる不幸な若者のための莊重な祈りのうちにブラアムスのラプソディは終るが、詩人の同情はさらに、いま何處かの雪のなかに

に獵をしてゐる友人たちの上に向けられ出す。彼は山林や畑を荒す野獸どもを勇ましく獵してゐる彼等の上にも神に祝福を乞ふのである。それから、最後に彼は彼自身それらの友人から離れて只一人、かうして魂の安靜を求めつつ雪のなかに道を尋ねてゐる自分自身の上に立ち歸つてゆく。

おゝ愛よ、おんみの詩人の

このしとどに濡れし髪を

常緑の葉もて覆ひたまへ

さう祈りつつ、詩人はその愈々困難なるハルツ登攀を續ける。そして自分が何物かから加護せられてゐるといふ信念を得つつ、幾多の艱難に耐へゆくのであつた。

數日後、旅人は遂に前人未踏のプロツケン山の絶頂を極める。きり立つた花崗石の頂きに秃鷹のやうに立つた詩人——彼の上方には明るい明るい空がある、そこからは太陽が烈しく灼きついて、外套の裏からは焦げ臭い匂ひが立つ程だ。そして足下にはちつと動かない雲が一面に立ちこめてゐる。僅かにその隙間からはすつかり雪に掩はれた山や谷がかいま見えてゐるばか